ある脇役の英雄譚　改訂版

小元 数乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある脇役の英雄譚　改訂版

【Ｎコード】
Ｎ７１３４Ｗ

【作者名】
小元　数乃

【あらすじ】
魔王の侵略。王侯貴族たちの腐敗。騎士団の弱体化。
様々な問題を抱えるスカイズ王国首都アタナシアに彼の姿はあった。
この世界ではわりとどこにでもある金髪碧眼。職業門番。趣味は釣り。歩く姿は一般人。

自分から『脇役だから～』といってしまう彼の名前はヴァイル・クスク。能力があるがゆえに貴族に色々と妨害を受け、いろいろなことを諦めてしまったダメ人間である。

そんなだらけきった雰囲気で、こっそりと王都を守りながら平和な暮らしを享受していた彼に、王宮からの突然の命令がやってきた。

『勇者召喚するから、その間の王宮警備をしろ！！』

そして、異世界から召喚された勇者とその友人によって、彼の生活は激変する！！

プロローグ（前書き）

二次創作が忙しいから……これ以上話膨らませんのは無理だろ～。

もろもろの理由で更新をやめるどころか、存在そのものを消してしまっていた問題作です。

色々と改造して再び投稿することにしました。

二次創作が全部終わるまでこちらに本腰を入れて更新することはできませんが、なにとぞ温かい目で見守ってください。

プロローグ

主人公……ヴァイル・クスクは『脇役』である。

金髪碧眼という、この世界ではわりとどこにでもある容姿。職業は門番。趣味は釣り。歩く姿は気のいい兄ちゃん。もはや『脇役どころかモブじゃね？』といわんばかりの容姿の彼であったが、そんな彼でもまわりが無能ならばそれなりの仕事をこなして『主人公』の真似事をしなければならないのだ。

たとえば……権力争いに明け暮れるあまり中央都市を守る騎士団が弱体化している王都。彼が門番をする、自称魔法大国・スカイズ王国・王都（アタナシア）がそれである。

騎士団はすべて貴族の身内で固められ、弱体化の一途をたどりもはやその武力を完全に消失していた。唯一の救いなのが国境を守る《四方騎士団》がいち早く権力の影響から抜け出し独自の武力とヒエラルキーを築き上げることに成功したことだろう。これによって今のところこの王国は何とか国境線の防衛に成功。かりそめの平和を国民たちは享受することができていた。

「とはいえ……いつまでもこんな調子でいて無事ですむはずもなく……」

ヴァイルはため息をつきながらそうつぶやく。敵……魔王軍は着々と進行を開始してきている。だからこそ彼はこんな夜遅くに仕事に駆り出されてしまったのだ。

現在彼がいるのは王都の南にある森の中。彼は、満月の明かりが

無数に差し込む薄暗い森の中を凄まじいスピードで駆け抜け、森の最深部へと向かっていた。なぜ彼がこんなところにいるのかというと、昨日城壁警備隊がキャッチした情報にこの森の多くの魔獣が潜伏しているという情報が入ってきていたからだ。

「これ全部駆除しても王宮に報告して褒美をもらうこともできないんだろう？　まぁ、報告したところで騎士団が全部手柄を持っていくんだろうけど……」

世知辛い世の中だ。まったくもってウザったい。

不快な感情を隠そうともせずに、内心でそう吐き捨てながら、ヴァイルは最深部に到着。周りを見渡し、そして……

「ようやく来たか……。眠たいんだからもう少し早くに来いよ」

（わざわざ誰でも気づけるようにあんな大きな足音させながら走り回ったんだから）

ヴァイルの内心で発言された不吉な言葉。残念なことに、その言葉を襲撃者たちは聞くことができなかった。

「ＧＡＲＵＲＵＲＵＲＵ！！」

明らかに人間ではなさそうなシルエット。森に中から出てきたそれらは赤く光る眼をランランを輝かせて、ヴァイルの周囲を固めていく。どうやら数の利を使って獲物を狩る魔獣のようだ。その数は、十……二十と時間が経つごとに増えていき止まる所を知らない。

しかし、その膨大な数のシルエットたちの出現にも、ヴァイルは

特に動じた様子を見せることなく、マイペースに背中にさしていた槍を手に取り、舞いを踊るかのように数個の型を披露する。そして、コンディションがいつもと変わらないことを確認した後、ヴァイルは眉をしかめながら森の中からこちらをうかがってくる者たちに話しかけた。

「明日も仕事があるんだ。五分で終わらせる」

それが開戦の合図。シルエットたちは森から一挙に飛び出し、ヴァイルに凄まじい速度で攻撃を仕掛けた！！　姿は二足歩行をするオオカミ。その大軍が、まるで直接的攻撃力を持った風のようにヴァイルへと襲い掛かる！！

飛び散る火花。鳴り響く金属音。

数秒という短い間に、何度も続いたそれがやんだ後には……。

「鋼の毛皮に白銀の爪と牙。魔王軍先兵……アイアンウルフか。本来なら斥候に使われる猟犬だろうに……。うちの王都に直接攻撃を仕掛ける気ならちょっと弱すぎるな？」

なめられてんのか？　誰に聞かせるでもなくそうつぶやくヴァイルの体は完全に無傷。そして、アイアンウルフたちは……

ＧＹＡＡＡＡ……。

哀愁漂う声で絶叫を上げ、その数秒後、喉から血を噴出させて絶命した。おそらくヴァイルを攻撃するのに使ったのだと思われる彼らの爪や牙は無残に折れており、そこかしこに欠片を散乱させている。

「悪いな。俺は基本的に攻撃が効かないんだ」

ヴァイルはそういうとおもむろに地面に拳を突き立てる！

ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＮ！！

到底人間のコブシが地面を殴りつけただけでは起らないであろう轟音が辺り一帯に響き渡り、まるで爆風のような衝撃波とともに土煙をまきちらす！！

森の中に潜んでいたアイアンウルフの残党たちは、それをみてあわてて逃げ出そうとしたが、時はすでに遅く、衝撃波に巻き込まれた彼らは意識を失い、土煙にのまれてしまった。

「《天使》の国の《魔術》って言葉を知っているか？　俺はそこで《体操作》っていう魔術を教えてもらった。体にどんな攻撃でも耐えられるような硬さや耐久度を持たせたり、体の重量を１０ｔまで重くしたり１ｍｇまで軽くしたりすることができたりするわけだ。ちなみにいまのは《硬化》と《重量増加》の合わせ技だ」

土煙がやみ、その中から出てきたヴァイルはひらひらと手を振りながらそう話す。彼の後ろにはまるで隕石の直撃でも受けたのではないかと思えるほどの巨大なクレーターが出来上がっており、衝撃波に巻き込まれ気絶していた哀れな何匹かのアイアンウルフたちは、槍による攻撃で止めを刺されたのか絶命してその中で転がっている。

「更に、俺はその特性を自分の服や武装に移す魔術……《感染》魔術も教えられている。この槍の状態はさっきのおれの拳と同じだぞ？」

重量１０ｔ。硬度ダイヤモンドの３倍。何人も傷つけられぬ無双の槍。

勝てない……。この敵と戦えば自分たちは確実に死ぬ！！

本能的に実力の差について気付いているアイアンウルフ達は、明らかに怯えの色を浮かべて後ずさる。だが、彼らも引くことはできない。おめおめ尻尾を巻いて帰ったなどと飼い主に知れれば、どちらにせよ悲惨な死を遂げるのだから。

「というわけだ。尻尾巻いて祖国に帰るか、俺に殺されるか……好きな方を選べ。駄犬ども」

答えはすでに出ていた。

天高く飛びあがりヴァイルを食い殺そうと咆哮を上げるアイアンウルフ達を見て、ヴァイルは眉をしかめながら槍を構える。

「まったく。命を粗末にしてんじゃねぇよ」

ただでさえ、魔族関連のものを殺すのは気が咎めてんだから……。ヴァイルのつぶやきは闇へと溶け、

殺戮の夜が始まる。

1話（前書き）

始まり始まり～

1話

のどかな朝。空にはトンビが気持ちよさそうに飛びヒュルヒュルと鳴き声をあげている。

そんな朝には不釣り合いな、漆黒に塗りつぶされ、尋常ではない威圧感を発する城壁。

そこに設置された小さな小屋のようなスカイズ王国南門の門番詰所には、南門警備隊長であるヴァイル・クスクが座っていた。今日も今日とて首都に出入りする商人たちや旅人達から、通行税徴税という名のカツアゲをするためである。

「……ｚｚｚ」

目を閉じながら！　鼻提灯を膨らませながら！！

「あの～。いいのでしょうか？　このまま素通りしてしまって……」

「いいんだよ。もし起きていたとしてもヴァイルの旦那は金なんかとらねぇ。あの人この国の中枢が大嫌いだから『俺らから金巻き上げるくらいだったら王宮で打ち首になったほうがまし！！』ってこの前豪語していたぜ」

そんな会話を交わしながら、見張りをしているヴァイルの目の前をベテランの商人と新人の商人と思われる人物が素通りしていく。

しかし、ヴァイルは決して寝ているわけではない！　彼らは実は彼の生き別れの兄弟で顔も素性もよく知っているから……怪しい人

物ではないと知っているから、素通りさせているのだ！　『王宮から提示された法外な通行料をとるのがめんどいから』とか、『昨日夜中近くまで魔物の駆除をしていたため眠たいから』とか、『法外な金とって俺が恨まれるくらいなら国が破産した方がよくね？』とか、そんなことは一切考えていない！！

「「「「「お世話になりまーす！」」」」」

先ほど行商人の団体が二百人ほど素通りしたが、彼らを素通りさせたのも、実は彼ら全員ヴァイルの親戚で素性を知っているからであって、決して『仕事が面倒だから』とかそういった理由はない。ないったらない！！

「働かんかこのボケナスがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そんな風に内心で苦しい言い訳を繰り返し、仕事をさぼりまくっているヴァイルに裁きの鉄槌は落ちないのか？　いや、落ちないわけがない。

天高くそびえたつ城壁の中からそんな怒声が聞こえてきたかと思うと、城壁にあけられた窓から赤い雷が飛来！　ヴァイルが突っ伏していた机に直撃！！　机を炎上させた！！！

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？　さ、サーシャ隊長！？　ち、違うんです！！　これには深いわけがありまして……。先ほど素通りしたのは実は全部俺の親戚……」

さすがに真横で小火が起きれば面倒くさがり屋のヴァイルも目を覚ます。

いきなり発生した高温の熱量に、悲鳴を上げて飛び起きるヴァイル。あわてて怒声の主に言い訳を始めるが、当然そんないい加減な言い訳が通じるわけもなく、

「そんなわけあるかぁあああああああああああああ！！　というか、門番なら親戚でも素通りさせるんじゃないのぉおおおおお！！」

結局その怒声の主は城壁の窓から飛び降りながら、ヴァイルに向かって雷を降らせた。

「ぎゃぁあああああああああ！？　シャレになってない！！　シャレになってないです隊長ぅうううううう！！」

そんな風に悲鳴を上げながら逃げるヴァイルに、かなりの高さから落ちたにもかかわらず平然と地面に着地を決めたどころか、逃げるヴァイルを元気よく追いかけはじめる怒声の主。

城壁警備隊の地味な制服をビシっと着こなし、紫の長髪を簪でまとめ、豊かな胸を揺らしながらヴァイルを追いかける彼女は、城壁総合警備隊長サーシャ・トルニコフ。ヴァイルの上司で城壁警備隊のトップである彼女のいつもの折檻風景を見て、城壁を通るためにやってきていた商人たちは『またか』と言うふうに苦笑を浮かべるのだった。

……†……†……†……†……

「それで……。俺に仕事をさせることだけに全神経を費やしている隊長が、わざわざ俺を持ち場から引き離してあんたの執務室に連れて行く理由はなんですか？」

場所はヴァイルが言ったように執務室。ヴァイルの折檻に一通りのことをやり満足したと思われるサーシャは、どういうわけか城門の見張りをヴァイルの部下に命じ、ヴァイル自身を自分の執務室に呼びつけたのだ。

質実剛健を絵にかいたように体現した何もない執務室。そんなところに不釣り合いな、『さっさと仕事さぼりたいんですけどー』といわんばかりにだらけきった雰囲気を垂れ流しながら、（制服もかなり着崩しているためその雰囲気に拍車がかかっている）ヴァイルは皮肉を飛ばす。

そんなヴァイルに頭痛でもおぼえたのか、サーシャは頭を押さえながら、若干の怒りをはらんだ嫌味をヴァイルにぶつけた。

「自覚しているならもっと自主的に仕事をしてほしいんだが？」

「ほら、俺って『仕事をさぼって居眠りしていたら、いつの間にか主人公から脱獄されてしまった牢屋の看守』的な脇役ですから」

「自分を貶めてまで働きたくはないのか、まったく……。そんなお前に朗報だ。昨日の今日で悪いがまた強制特別任務だ。といっても、今回は王宮公認だがな」

少々面倒な仕事を押し付けられた。と、サーシャは明らかに気が

進まなさそうな顔をしながら一枚の書類をヴァイルに渡す。

「これは？」

「王宮からの命令書だ。なんでもわが城壁警備隊から七百人ほど兵をかせとのことだ」

「七百も？　確かにうちは人数多いですから、そのくらいの貸出しへでもないですけど、そんなに兵隊集めて一体何するつもりなんですか？　それに、俺たちのような下賤な血が入った人間を王宮にあげるなんて今までにない事態ですし……」

あまりいい予感はしないな。

と、ヴァイルは思う。

あのプライドが高い王族・貴族が、普段は『下賤な輩』とさげすんでいるヴァイルたちに協力を求めてきているのだ。不気味なこと極まりない……。

と、疑心暗鬼に駆られてしまっているヴァイルに小さく嘆息をしつつ、サーシャは今回の命令の原因をそっと告げてやった。

「なんでも……勇者を召喚するんだと」

ヴァイルはサーシャの言葉を聞き、数秒の思考の後、

「え……いまさら？」

なんだか気の抜けたような表情で、唖然とするのであった。

…†…†……†…†…

『勇者召喚』。それはスカイズ王国が『魔法大国』を対外的に名乗っていられる唯一のファクターである。

この魔法は大陸東部を占領統括している『魔王』が復活したときに発動されるもので、異世界から才能ある人間を無理やり呼び寄せ、魔王と戦ってもらおうという……何ともまぁ他力本願かつ、どうしようもなくはた迷惑な魔法なのだ。

まぁ、その勇者必ずと言っていいほどが一定の功績をあげてしまうので、この魔法は脈々と受け継がれてきてしまっているわけだが……。

「まさか本当にやるとは……。歴代勇者がろくなことにならなかったのは知っているだろうに……」

初代勇者は「明日センターテストだったのに！！」と呼び出された瞬間ブチキレて、当時の王に掴みかかったらしい。その後しばらくはおとなしくしていたが、勇者としての力を目覚めさせるための儀式を受けた後即座に国を出奔。当時この国に敵対していた他国へと逃げ、その国に彼が持ちうる知識のすべてを与え、その国に巨万の富を築かせたとか……。ちなみにその国は今ではスカイズ王国を

含む三大国に数えられており『科学の国』として発展している。ちなみにその勇者がどうなったかを知る者はいない。

先代……二代目勇者はどうしようもない泣き虫だったようで、召喚された瞬間に「おうちに帰して！！」と号泣し始め、その当時の王に『使えない』という烙印を押され違う国に捨てられたらしい。しかし、その勇者……成長率が半端なく、あっという間に当時最強の魔法剣士をブチのめし、その称号を奪い取ったあと、二か月で魔王領を占領。当時の魔王を瞬殺したらしい。その後は旅の仲間の一人だった、どこぞの姫君と結婚して新しい国を作ったとか……。ちなみにこの国も三大国に数えられており『勇王の国』として名をはせている。現在最も軍事力が高い国である。

つまり何が言いたいのかというと……。勇者呼び出しても、うちの役に立つ可能性は限りなく低くないか？　ということである。

まぁ、ヴァイルはとある理由からスカイズ王国の王族とそれに連なる貴族が凄まじく嫌いだ。べつに勇者を呼び出した後その勇者が貴族に害をなそうが、国に不利益をもたらそうが、知ったことではないのだが、

「いくらなんでもこれは見逃せないだろう？」

王宮に呼びだされ、そこの花壇の見回りと手入れを任されていたヴァイルは、その花壇の中に隠されていた魔法具を拾い上げ少しだけため息をついた。

球体状の小石に目玉のような模様が刻印されている魔道具。確かこれは……魔法、科学、軍事力、そのすべてが謎に包まれた巨大帝国《天使の国》のもの。

知り合いに《天使》がいるのでこういった魔道具についてもいろいろと教えてもらっているヴァイルは、これがなんなのかを知っていた。

「『セントピエトロの瞳』だったか？　魔力の収束阻害が主な効果だったはず……」

背中から抜き放った槍でその魔道具を真っ二つにたたき割りながら、ヴァイルは首をかしげた。

「こんな妨害しかできない、悪趣味な形をした魔道具をうちのバカ貴族たちが花壇に置くとは思えないし。いったい誰が置いたんだ？　最近隊長が怪しんでいた間諜でもマジで入っていたりして」

だとしたら、その裏切り者は一体どうしてこんなものをここに置いた？　うちの王宮の奴らは宮廷魔導師ぐらいしか魔法を使える人間はいない。わざわざこんなものを置いて魔力の集中を阻害する必要などどこにもない。おまけに国も絞りきれない。天使の国では十中八九ないだろう。あそこはわざわざうちに間諜なんて飛ばさなくても《透視・遠視》の魔術でも使えば情報なんて集め放題だろうし。だとすると『科学の国』か『勇王の国』のどちらか。もしくは魔王軍……。

と、ヴァイルはそこまで考えた後で何かにひどく絶望した様子で頭を抱えた。

「って、何シリアスにきめて考え込んでんだよ、俺。俺は『わけのわからない物品を見つけた瞬間、味方に化けていた敵の間諜に殺されてしまう』感じのわき役だろ？　なに真剣にこの国の行く末につ

いて考えちゃってんの……」

隊長のせいで働き癖がついちゃったじゃないか。鬱だ……死のう。そんな風に激しく落ち込むヴァイル。だが、そんな彼の後ろから静かに危機は迫っていた。

…†…†……†…†…

それはひどく美しい男だった。短くきり揃えられたサラサラの青髪。顔はまるで神が作り上げた芸術作品のように整っている。そんなイケメン優男。だが、その右腰には彼には不釣り合いな大剣がつるされており、彼がそれなりの荒事をこなせることを示していた。

スパイのように完璧に無音で、気配を殺して近づいてくるその人物にヴァイルは気づくことができていない。

「ふっ……」

その人物は最後に凶悪な笑みを浮かべると同時に、足のバネを使い、一気にヴァイルへと飛びかかった！！

「ふん！！」

「げぶっ！？」

しかし、今まで完全に絶望の海に沈んでいたと思われたヴァイル

は、あっさりと男の突撃に反応し、それを躱してしまう。どうやら今までの態度は全部演技だったようだ。

変な悲鳴を上げて花壇に突っ込む男に、ヴァイルは思わず三白眼になった。

「何してんすか、ゲイルの大将？」

「幼馴染なんだから敬語はやめろ、って言っただろう？」

「大将は貴族出身の騎士で、俺は平民の下っ端です。敬語を使うのは当然でげす」

「それで敬語を使えているつもりでいるお前にびっくりだよ……」

そんなことを言いながら立ち上がり、鎧についた泥を払落し、青い髪を持ったイケメン騎士――ゲイル・ガンフォール・ウィンラートは、ヴァイルに屈託のない笑みを向けた。

それによって跳ね上がる、空気中のイケメン度数に閉口しながらヴァイルはチッと舌打ちを漏らす。

（毎度毎度思うが、この幼馴染はどうしてこんなに神様に愛されているのだろうか？　まぁ、俺は脇役だから今更そんなこと気にしないけど）

と、ちょっとだけ負け犬の遠吠え的な思考をしつつも、ヴァイルは特にそのことを表情に見せることもなく、呆れたといわんばかりの声音で、ゲイルに質問をぶつけた。

「それで、どうしてこんなところにいるんすか？　今は騎士団のバカどもは忙しいんでしょうが」

このゲイル、こう見えて騎士団副団長という結構な地位についているため、勇者召喚という一大行事が行われている今、こんなところで油を売っている暇はないと思うのだが……。

「城壁警備隊の連中が来ているって聞いたから、お前はいるかな～？　とは思って見にきたんだけど、ほんとにいたんだな？　王宮嫌いのお前にしては珍しい」

近くの花壇に腰を下ろしながらそんなことを言ってくるゲイル。ヴァイルもそれに合わせて近くの花壇に腰を下ろした。

「サーシャ隊長の強制命令ですよ。じゃなきゃこんなところにはこねーです。というかそんなこと聞いていません。今は勇者召喚の式典の時間でしょうに？　副団長が抜け出して大丈夫でげすか？」

「いや……。オレとしては勇者召喚にはあんまり乗り気じゃないんだよ。うちの世界の事情にほかの世界の人間を巻き込むのは気が引けるし……。おまけになんだか魔力の集まりが悪いらしくて、儀式がかなり長引いているんだ。かれこれ二時間も呪文を聞いていたから飽きてしまって……。ちょっと気晴らしに外にでてきたというわけ」

ゲイルの苦笑交じりの説明に、ヴァイルは納得したと頷きながら、先ほどつぶした魔法具を思い出していた。

（魔力の集まりが悪い。普段なら宮廷魔導師どもが無能なんだろうって笑ってやるところなんだが、今回ばかりはそうもいっていられ

ないな。明らかに原因はあの魔道具だし。目的はおそらく勇者召喚……か？　だとしたらあの魔法具を置いたのは魔王軍でほぼ確定だな）

最後にはあまり考えたくはない結論に達してしまい『うわ～まじで～。間諜がいる可能性が濃厚になってきたじゃないか……。マジでウザいな～。そして、俺はまた仕事のことを考えているし！！』と、内心でげんなりとしつつも、ヴァイルはおおきくため息を一つ、

「ハァ……。ただでさえめんどくさいのに、勇者召喚なんてしやがて。勇者とかほんとこなければいいのに。あ、じゃあの魔道具こわすんじゃなかった。貴族に恥かかせられるわ、勇者は来ないわで一石二鳥だったな～」

「ん？　何か言ったか？」

ヴァイルのつぶやきが聞こえたのか、やれ新しく入った部下が厳しいだの、妹に彼氏ができてしまったどうしよう？　などと世間話をしていたゲイルは少し話をやめてヴァイルにそう尋ねてきた。

「……」

ヴァイルはゲイルにこのことを話すかどうか迷い、考え込む。

王宮嫌いの彼としては王家が弱体化するのは望むところだ。だが、ヴァイル個人としてはそんなくそ危ない王宮の中に友人であるゲイルを置いておくのも気が引けた。

かといって、『王宮は危ないから逃げた方がいいよ～』といったところで逃げる男でもないし……。

「はぁ〜。お前って本当にウザいな〜」

「敬語やめたと思ったらしょっぱなから悪口かよ！？」

ため息交じりに友人の面倒臭さを再確認したヴァイルの言葉に、ゲイルはアイアンクローを発動した。

…†…†……†…†…

それからしばらく経ち、ヴァイルが花壇の世話に戻り、ゲイルが自分が突っ込んでしまったせいで荒れてしまった箇所を直し始めたときだった。

「なんだ？」

「天気が変わった……というには急すぎるな？」

空模様が急に怪しくなり始めて、ゴロゴロと不穏な音をたてはじめたのだ。いったいなんだ、と首をかしげる二人。だが、彼らの疑問はある人物の登場によってあっさりと解決する。

「何をしておられるのですかウィンラート卿！！」

あからさまに『怒っています！！』言わんばかりの声音でゲイルと同じような甲冑を着こんだ美女が、ものすごい勢いで怒鳴り込んできてゲイルの耳を引っ掴んだ！！

「イタイイタイ痛い！！　なにするんだ、シルベット！！」

「それはこっちのセリフですわ！！　せっかく儀式がうまくいき始めというのに、いつのまにかあなたが消えてしまって騎士団中大騒ぎですのよ！！　騎士団長や国王陛下の顔色がもうこの世界の人間ではありえない感じになっていましたわ！！」

「え、うそ！？」

ああ、そういえばさっき魔道具こわしたから魔力はちゃんと集まるようになったんだったな。と、いまさらながらそれに気付いたヴァイルだったが、

『まぁ、もとより関係のない話だしどうでもいいか』と自己完結。さっさとゲイルを見捨てることにする。

「いいからさっさと帰ってきてください！！　もうすぐ勇者様がこちらにいらっしゃるのですから！！」

ゲイルの耳を引っ掴んだままそういう彼女は、黙々と花壇をいじっていたヴァイルに目を向け『ふんっ』と鼻を鳴らし、

「警備ご苦労様です！！」

傲然とそう言い放った。

（ん？　あれ？　これ俺に向かって言われてね？）

てっきり無視されるものと思い、特に何の反応もするつもりはなかったヴァイル。しかし、女騎士はきっちりこちらに挨拶をしてきており、

「こ、こちらこそ！！　お仕事ご苦労様です！！」

ヴァイルはあわてて立ち上がり敬礼を返した。そんなヴァイルを満足そうに見た後、女騎士は、ゲイルの耳をつかんだまま彼をズリズリと引きずり王宮内へと姿を消した。

（珍しい奴もいたもんだ。平民にねぎらいの言葉をかけるなんて……。まぁ、態度はかなり悪かったが）

おそらく、さきほどゲイルが話していた新しい部下であろう女騎士に、少しだけ感心しながらヴァイルは黙ってその女騎士を見送った。

途中ゲイルが、

（助けろよ！？）

とばかりにアイコンタクトを飛ばしてきたが、

（うっさい。おとなしく仕事に戻れ）

と、返してやった。

その後ヴァイルはすこしだけ、ゲイルが消えた王宮を見つめ、

「最近……人を連れて行くときは耳を引っ張るのが流行っているのか？」

勇者なんてものには微塵も興味を見せることはなく、『そっちの方がどうでもいいだろ！？』といわれそうなことを気にしながら花壇の警備へと戻るのだった。

2話

「今日も王宮へレッツゴーだ」

「……理由を聞かせてください」

ものすっごく渋い顔をしながらそう言ってくるサーシャに、ものすっごく嫌そうな顔のヴァイルはそう問い返す。

勇者召喚の儀式が終わった翌日。再び朝早くにたたき起こされたヴァイルは、眠さで閉じてしまいそうな目蓋を必死にごしごしこすりながらサーシャの執務室に立っていた。

そこで知らされた信じられない事実。

うちの王族が二日も連続して俺たち平民に城の警備を任せるなんて……明日は槍の嵐か、雷の雨か……。どちらにしろ、ろくなことにならないに違いない。

そんなくだらないことをヴァイルが考えているとは知らないまま、サーシャは大きなため息をつきながら、疲れ切った瞳でヴァイルを見つめた。

「まぁ、理由もクソもまた貴族のわがままなんだけどね……」

「まぁ、一応理由だけでも……。あと隊長は一応女性なんですからクソとか平然と使わない！！」

「はぁ、聞くだけ損した気分になるよ？　あと、一応ってなんだ？

殴っていいか？」

「どこまでひどい理由なんですか……。あと、殴られるのはごめんこうむります」

あんまりなサーシャの言い草に愕然としながらヴァイルは一応話の続きを促してみる。確かにろくな理由ではないだろうが知らないよりかはましだろうと思って……。だが、

「昨日勇者様が来たじゃないか？」

「ええ、知り合いが耳引っ張られながら連れていかれましたから……」

「？　まぁ気になりはするがあんたの話は、今はどうでもいいよ。でね、うちの王族たちは……『こ、今度こそは勇者様にうちの国の勇者になってもらわなくては！！』って思っているわけ。そこでいま王宮では全力で勇者様を出迎える準備をしているから、王宮警備に騎士団を裂いている余裕はない！！　だとさ……」

「……」

ヴァイルは……聞かなきゃよかったと思った。

いや、まぁ、心情は分からなくもないが、仮にも自分たちの拠点守るよりも客人のもてなしを優先するってどういうこと！？

自国の貴族のバカさ加減にほとほと呆れながら、ヴァイルは少しだけ大きくため息をつき、

「ウザいですね」

「王宮では絶対に言うなよ？」

なんかもう、寝不足すぎて不機嫌の針が振り切ってしまい、逆に笑顔になりながら毒を吐くヴァイルを見て、サーシャは若干顔を引きつらせるのだった。

…†…†……†…†…

「であるからして……諸君ら平民がこの高貴な宮殿を守れるのはとても光栄なことであり……」

キラキラと水が朝日に反射し、輝く噴水。風に揺らされサラサラと、耳の心地よい音を奏でる整えられた芝生。それによって美しく彩られた王宮内の正門広場。そこに響き渡るのは、この広場にはひどく不釣り合いなデップリト太った騎士団長の口やかましい演説である。

現在は朝の１０時。サーシャの命令によって早朝６時に王宮にやってきたヴァイルたち城壁警備隊を待っていたのは、現騎士団長からのありがた～い御講話（笑）。

『やれ高貴な王宮を守れることを誇りに思え！』だの、『本来なら

土を踏むことすら許されない場所に呼んでいただいたことを国王陛下に感謝しろ！！』だの、『王宮を守るためには自分の命すら投げ出せ！！』だの、そんな感じの説教が約四時間。延々と続いて『今ココ！！』になるわけだが、

「そう思うんだったら仕事させろよ……」

自分が率いる南門警備部隊の隊長として先頭に立ちながら、おっさんの声を聴いていたヴァイル。そんな彼は、殺気でどす黒く彩られた呪いの言葉を、騎士団長に聞こえないようにつぶやいた。もう、怒りの針が振り切れて真黒なオーラ垂れ流しまくりだ。

「旦那。あんまりはっきり言うと相手に聞こえます。あとあんた仕事嫌いでしたよね！？」

そんな彼に若干呆れた声音で左隣からツッコミを入れるのは、短く切りそろえられた桃色の髪を持つ『どう見ても１０代美少女！だけどほんとは三十路のおじさん！？』などという意味不明のビジュアルを持つ城壁警備隊の七不思議。『萌える』東門警備隊長ロベルト・マッケンディーである。

「まったく……仮にも相手は騎士団長なんですからもう少し自重してくださいよ……」

「いやいや……。だって仕方ないだろう？　炎天下の中、鎧きこんでわざわざ徒歩でやってきたっていうのに、待っているのは暑苦しいデブのおっさんの演説だぞ？　誰とく～？　だろ。むしろ『おっさん死ねっ！！』って思っている人間の方が大多数だろ？」

「僕たち隊長陣は鎧来てませんけどね」

制服、態度ともにダラっとした雰囲気を垂れ流しながらグチグチ文句を言うヴァイルに、ロベルトはアハハハとうつろな笑みを浮かべて肯定した。

「まぁ、旦那の怒りはわかりますけど……」

しかし、相手は仮にも騎士団団長だ。このままヴァイルを放っておくわけにもいかず、ロベルトが一応ヴァイルをいさめようとした。

そのとき、

「大将！！　そんなに嫌なんだったらいい方法がりますぜ！！」

ヴァイルの右隣に立っていた、ヴァイルのさぼり仲間である北門警備隊長、アルフォンス・クラーシタニアが話しかけてきた。

このアルフォンスという男。実は、

「いい方法？　なんだよ、それ」

「あの隊長のことをサーシャ隊長だと思い込むんすよ！！　そうしてみるとあら不思議！！　どんだけ暑苦しいおっさんの演説でも、あっという間のおれたちを喜ばせる、サーシャ隊長の罵りに……」

ヴァイルたちの世界ではまだ珍しい『ドM』という、たぐいまれなる異常性癖を持つ変態だった。

「なるかバカ。というか罵られて喜ぶ奴なんてお前以外いな……」

ヴァイルはいつものようにため息交じりに、アルフォンスの戯言を封殺しようとしたが、

「はぁはぁ……サーシャたんもえ」

「ああ、もっとののしって！！」

という不穏な言葉が風に乗って部隊の方向から聞こえてきたので、若干顔をひきつらせた後、頭を抱えた。

「旦那……」

「アルフォンス菌に感染してしまったか……」

「人を伝染病みたいに言うのやめてくんない？　さぁ、大将も俺たちと同じステージに立つときが来たんですぜ！！」

「誰が立つか、ド変態！！」

「ふはははは！！　もはや私にとってそれは褒め言葉ですな！！」

「なん……だとっ！？　貴様……いつの間にそんな神がかった返しを言えるようになった！？」

「旦那わざわざ乗らなくてもいいですって……」

「そこぉ！！　静かにしろ！！」

何やら騒がしくなってきたヴァイルたち隊長の雑談に、とうとう我慢の限界がやってきたのか、騎士団長がようやくまともな理由で

怒鳴り声を上げたのだった。

…†…†……†…†…

「「さぁて……仕事、仕事」」

「そういうんだったら今すぐその重い腰を上げてください！　アルフォンスさん、旦那！！」

結局あの騎士団長の演説が終わったのはあれから三時間後だった。現在はお昼の一時。ただでさえ少ないヴァイルやアルフォンスのやる気を御臨終させるには十分な時間帯だ。

というわけで、現在ヴァイルとアルフォンスは、警備はほかの兵隊たちに任せて自分たちだけは演説があった広場から動こうとせずに、噴水のフチに寝転がりながら、ダラダラのんびりとしていたのだ。もちろんロベルトはそんな二人を何とか働かせようと孤軍奮闘しているのだが、正直押され気味である。

「いやいや……。ちゃんと働くよ。目が覚めたら」

「あと４時間したら考えねーこともねーですけど……」

「見張りの時間が終わってしまいますよ！？　どんだけ休む気です

か！？」

こんな風に……。

「うっせーな。あんだけ長い時間警備兵を一か所に集めておいても大丈夫なくらい平和なんだったら、俺ら二人がサボったところで大した影響はねぇよ」

「部下へのケジメの問題です！！」

だらけきった声音で、何やら屁理屈をこねてくるヴァイルたちを、どう見ても美少女のロベルトがしかりつける光景……。まるで、ニートになった兄たちを叱りつける妹である。

実際は三十路になったおっさんが『人生なめんな！！』とダメ後輩たちを怒鳴りつけているだけなのだが……。

「あなたたち……なにしているの？」

本来ならばサーシャあたりが怒鳴りつけにやってくるのだろうが、あいにくとここは王宮である。貴族や王族はわざわざ平民を気にかけるようなことはしない。唯一怒ってきそうなのは騎士団長だが、彼は現在勇者様にかかりっきりのようなので、誰かが声をかけてくることなんてまずないだろうと高をくくっていた、ヴァイルとアルフォンス。

だから、突然見慣れない少女が話しかけてきたときは、正直心底驚いてしまった。

後ろで結ばれたポニーテールを揺らしながら現れた少女は、この

世界では珍しい黒髪に茶色い瞳。年齢はヴァイルよりも若干年下といった感じ。大体１６、７歳ぐらいだろうか？　科学の国で開発された新しいスタイルの服装で、サーシャがわざわざ取り寄せて城壁警備隊の女性士官の制服にしてしまった《ブレザー》と呼ばれる服装に酷似している。しかし、質は段違いに良さそうだ。この世界ではまず作れなさそうな上等な布で作られたそれは、どことなく賢そうな雰囲気が漂っているように見える。

「なにって、サボりっすけど」

「堂々と何を言っているんですか……」

「う～ん。御嬢さん。僕の守備範囲にはちょっと足りないな～。あと二年歳を取って、一言目が『平伏しなさい！　この薄汚い豚ども！！』になったらもう一度声をかけてね～」

「こんな子供に何言わせる気ですか！？」

「あははは！！　面白いわねあなたたち！！」

まぁ、自分たちに話しかけてきた時点でこの国の貴族ではないだろうと予想した二人は、アクセル全開でいつものようなおふざけ満載な言葉を放つ。どうやら少女はそれが気に入ったらしく、大いに笑いながら二人のことを許した。

「ちょうど未来――勇者のご機嫌をとるためだけにやってくるバカ貴族どもの相手をして疲れていたところよ。お話し相手になってくれないかしら？」

ん？　勇者？

ヴァイルがその単語の意味に気付き、だらけきった顔のまま凍りつく中、少女は、

「私の名前は富阪アリサ」

アッサリと、

「勇者召喚に巻き込まれた勇者の友人で」

にっこりと、

「王宮に軟禁されることになった、かわいそうなかごの鳥なの～」

すさまじい勢いで、彼らに厄介ごとを持ちこんできた。

とんでもない発言をかまし、一発でヴァイルたちは王宮の闇へと引きずり込んだ少女は、ニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべるのだった。

3話

「つまりあんたは今回の勇者をうちの国にとどめておくための楔なんだな？」

「まあ、そういうことになるわね。話に聞いたところによると歴代勇者はさっさとこの国はなれちゃったみたいだし～。私を人質に取っておけば勇者がこの国から離れることはない、って思ってのことでしょうね。まぁ、私が召喚に巻き込まれたのは事故みたいなものだったようだし、おそらくはアドリブで作った計画でしょうけど」

「そのこと、勇者は知っているのか？」

「あいにくと、あの子は人を疑うことはしない主義なの。貴族たちが直接口からそのことを言うまで、あの子は《あの人たちはいい人》って信じ続けるでしょうね」

まぁ、私もあの子に守ってもらうほどやわな女じゃないけどね～。アリサは自信にあふれた笑みを浮かべながら、肩をすくめた。

場所は先ほどと同じ広場。そこに設置された噴水に腰掛けながら、勇者の親友と名乗ったアリサは自分が召喚された大まかな事情をヴァイルたちに無理やり聞かせた。

《学校》という教育機関から自宅へ帰る途中に、突然空中に出現した渦に勇者ごと巻き込まれたこと。その後、目を覚ますと何やら偉そうなジジイ（うちの国王）と、威圧感たっぷりな甲冑人間（うちの騎士団）に囲まれてしまい、逃げるに逃げられなかったこと。最終的に国王から自分たちが呼ばれた理由を聞かされ『はぁ？　こん

な可愛くて幼い女の子たちに何頼んじゃってんの、この耄碌爺は？
そのくらい自分たちでどうにかしなさいよ』と言ってしまい殺されかけたこと（自業自得）……などなど。

なんで俺にこんな話ふるの？　俺は『商店街にでてきた勇者に褒められて若干機嫌がよくなったためリンゴを一つサービスする八百屋さん』みたいな感じの一般小市民的な脇役なのに。と、ヴァイルは頭を抱えた。

こんな物騒なこと聞いてしまった以上、うちの貴族たちは黙ってはいない。まぁ、近くに貴族はいないようなので、話したことを目の前の女が黙っていてくれれば万事解決なのだが、

「ああ、誰かこのかわいそうなかごの鳥を助けてくれないかしら～」

「「「……」」」

わざとらしいアリサの言葉に思わず無言になる三人。

「結構近くにいると思うんだけど～。具体的には１０代ぐらいの幼女を連れた二人組のおっさんあたりが助けてくれると思うんだけど～」

僕男なんですけど……。というロベルトのつぶやきを完璧に無視して話を続けるアリサに、ため息をつくヴァイルとアルフォンス。

「まぁ、そんなひと近くにいないから仕方ないんだけど。ああ、でもその人たちが助けてくれないとうっかり『愚痴をこんな人たちにこぼしちゃった～』って、似顔絵つきで貴族に言っちゃうかもしれないし～。ああ、本当に困ったわ～」

「「「……」」」

悪質極まりない！！

ギリっ！　と、奥歯をかみしめながらヴァイルは思わず天を仰いだ。ロベルトとアルフォンスの反応も大体そんな感じの反応だ。

こいつ本当に勇者の友人なのかよ！？　ああ、こんなことならきちんと仕事をしとくように見せかけて、違う場所でさぼっておくんだった。

あくまで働く気はないニート野郎のヴァイル。自業自得&反省という言葉は彼の辞書には載っていないようだ。

「はぁ。まったく厄介な女につかまっちまったな～。大将」

「まったくです。日ごろの行いが悪いからですよ、旦那。まぁ、救出作戦がんばってください」

「待て、お前ら……。なにナチュラルにお前たちだけ緊急回避しようとしているんだ！？　死なばもろとも、地獄の底まで付き合えや～！！」

ヴァイルはウガァ！！　と、叫びながら、なにやら『自分には関係ありませんよ～』といった顔で、するする離れていく二人の襟首をつかみ捕獲する。仲がいい三人組だ。

「まぁ、べつに逃げてもいいけど～私あなたたちの顔を完全に記憶したから、ぶっちゃけ逃げても無駄よ。こう見えても絵は得意なん

だから！！」

少女はそう言って地面に何やら絵を描き始める。どうやらヴァイルたちの似顔絵を描いているようだ。

その光景にちょっとだけ絶望しながら、どれどれ、と三人はその絵を覗きこみ……。

「散開！！」
「「応！！」」
「え、ちょ、なんでにげんのよ！？」

どこかのモンスターのようなぶっさいくな顔をした何かが描き出されているのを見て、即座に逃走へと移るのだった。

……†……†……†……†……

ヴァイルたちが逃げ出してから三十分ほどたった王宮内。真っ白な大理石の巨大な柱が囲む長い廊下を、三人のバカとアリサが走り抜けていた。どうやらいまだに追いかけっこは続いているようだ。

（はぁはぁはぁ……はやい。さすがは文明の利器に頼らない人間！！　デフォで持っている身体能力が違いすぎるわ！！）

しかし、彼女は元の世界では完全な帰宅部。特に運動をしていたわけでもない彼女の体力はすぐに底を突いてしまい足の動く速度は減速してしまう。当然、グングン三人組との距離は開き、今はもう世界陸上の選手でも追いつけないのでは？　というほど距離が開いてしまっていた。

「こ、こんなことなら、もっとちゃんと、体育の授業、うけておくんだった……」

青息吐息でへばるアリサを見て『チャンス！！』とでも思ったのか、そのまま分裂し別々の方向へ逃げ出すバカ三人組。

この上死人に鞭打つか……。体力が底を尽きてへばっている女子に対する仕打ちではない。アリサは明らかにバカにした雰囲気を放ちながら離れていく三人の背中を睨みつけ、トンっと手を地面につけた。

「こんなところで使う気はなかったんだけど……あんたたちが私を怒らせたのが悪いんだからね！！」

自分が三人を王宮内の裏事情に巻き込もうとしたことなど棚上げして、アリサは気炎を上げながら、この世界にやってくるときに幻視した『紅茶好きの黒い本』から貰い受けた力を発動する。

そしてその数秒後……。

「ぎゃぼ！？」

奇妙な声が前方から聞こえ、何かが固い地面にたたきつけられるような音が辺りに響き渡った。

アリサはその音を聞いた瞬間、今までの苦しそうな表情をひっこめ、意気揚々とその音が聞こえたところへと歩いていく。そして、

「つっかまえた〜」

しばらく行ったところ首だけ地面から突出し、残りの体のすべてを地面の中に沈めてしまって、目を回しているヴァイルを見つけ、ニヤリと笑みを浮かべるのだった。

…†…†……†…†…

それから数分後。再び広場にて……。

ヴァイル・クスクは自分の運のなさにほとほと呆れながら、自分ぐるぐる巻きにしばりつけた犯人を睨みつけていた。

「はぁはぁ。わたし体力ないんだからこんなクサレ広い場所で追いかけっこなんてさせないで！！」

「だったら逃げる俺たちを追いかけんなよ……」

まぁ、息切れしまくって芝生にぶっ倒れているアリサを見てその視線をすぐにやめたが。

現在つかまって広場に転がされているのはヴァイルだけである。ほかの二人は部下を使い、地形を使いあっさりとこの女から逃げ切ったみたいだ。

ヴァイルだって突然地面に沈んだりしなければ、今頃うまく逃げ切ったはずだったのに……。

誰だよ、あんなところに落とし穴作ったの？　ここ王宮の庭ですよ？　なにさらしてくれてんの、死ぬの？

こんな場所に御茶目な悪戯をしかけやがった誰とも知れない人間に悪口雑言をぶつけながら、ヴァイルはとりあえず地面を転がり、自分のつかえなさをアピールしてみる。

「いや……。もうマジで逃がしてよ～。俺は『曲者が入ってきたときの真っ先に切りかかったはいいが、あっさりと返り討ちにあって二度と出てこなかった～』感じのわき役だぞ？　そりゃ確かに一般人よりかは喧嘩得意だから兵隊なんてやれているけどさ、ほんとはこんなところにも入れない門番なわけでさ～」

何とも情けく、プライドも何も感じられない光景だが、もうヴァイルがこの厄介ごとから逃れるためにはそれしかなかった。もともと吹けば飛ぶようなちんけなプライドである。いまさら守るつもりなど毛頭なかった。

「ほらほら……。見たらわかるだろ？　使えなさそうな脇役臭がするだろ？」

「え？　脇　臭？」

「なんでそこだけピックアップするんだよ！？　それだったらふつうに脇の臭い人だろうが！？」

もしかして臭うの？　といわんばかりに嫌悪感たっぷりな表情で離れていくアリサをヴァイルは怒鳴りつけた。

ほんとなんなのこいつ？　俺なんか悪いことした？　ああ、そういや仕事をさぼりまくっていたな～。

「だが俺は働かない。『働いたら負けかなって思っている……』感じのわき役だから」

「もう脇役じゃなくて完全にニートじゃない……」

ヴァイルの戯言に呆れきった顔をしながら、ようやく呼吸がまともになったアリサは、しばりつけて転がされたヴァイルの隣に座った。

「まぁ、ぶっちゃけ逃げてもいいけど、名前完全に覚えちゃったから似顔絵なしでも十分に脅迫できる材料はそろっているわよ？」

ですよね～。いまさらながらそのことに気付き、ヴァイルはちょっとした絶望の笑みを浮かべた。

アルフォンスとか、ロベルトとかだったらまだありがちな名前なので何とかごまかせるかもしれないが、ヴァイルは完全にアウトだろう。少なくともヴァイルは今まで生きてきた中で自分の名前と同じ人間にあったことがなかった。

「はぁ……。で、俺は何したらいいの？」

「おお！！　協力してくれる気になったの！？」

「無理やりだけどな！！」

泣きながら一応の抵抗をしてみるヴァイルだが、無駄なあがき以外の何物でもない。

ヴァイルの返答を聞き、ひどくうれしそうな笑みを浮かべながら、アリサは指折り今やらなければならないことを上げていく。

「う～ん。そうね～。まずは……」

こうして、この時代に初めて組まれた異世界タッグは『ＳＡＶＥ！！　囚われの勇者の友人を王宮から脱出させよ！！』作戦実行のために、悪だくみを開始するのだった。

ヒーローside（前書き）

サブタイに偽りあり。

アリサ視点です

ヒーローside

赤い絨毯が敷き詰められ、大きな暖炉がある豪華な部屋。そこに設置された天蓋つきベッドに窓から入ってきた朝日が差し込み、そこで寝ていた人物の目覚めをうながす。

「んぁ……」

寝ボケきった声でうめき声を漏らしながら、少女は隣で寝ている親友を起こさないように、ゆっくりと身を起こし、まだまだ睡眠を要求し、閉じかける眼をゴシゴシとこする。

普段はポニーテールにしてまとめている髪も、今はぼさぼさ。山姥のような見た目になった彼女の名前は富阪アリサ。この世界に事故で召喚された哀れな異世界漂流民である。

「うわ……。また乱れてる。まとめんのにどれだけ時間がかかると思っているのよ」

いつものように自分の髪に触れ、ボッサボサになってしまっていることを確認したアリサは、無言のまま鏡台に設置された櫛を手に取り……。

「あり？　なんかいつもと違う？」

ようやく普段との違いに気付いた。どうやら今まで寝ぼけてしまっていたらしい。

「ああ。そういえば変な渦に巻き込まれて……その中で黒い本にあ

って……」

思い出した。その本に力を覚醒させてもらってある《能力》を得たと思ったら、突然偉そうなおっさんやら甲冑人間がいるところに放り出されて『勇者よ……魔王を倒してくれ！！』なんて、何時代のＲＰＧだよ！！　的なテンプレートなせりふ言われたんだっけ……。

自分が「はぁ？　こんな可愛くて幼い女の子たちに何頼んじゃってんの、この耄碌爺は？　そのくらい自分たちでどうにかしなさいよ」といってしまい、国王に殺されかけたことは綺麗に無視して昨日のことを思い出したアリサは、若干のため息を共に櫛を髪に通す。

あの態度からして、この国は封建社会制度。国王がトップに立って周りの貴族と一緒に国のかじ取りをしている感じかしら？　ファンタジー世界の相場で言うなら、こういう典型的な封建制度のトップは面白いくらい利権まみれになって腐っている物なんだけど……。

ボッサボサになっていた髪を何とかまとめ、髪を後ろに流しポニーテールになるようにまとめるアリサ。彼女はこの国の在り方を大まかに類推しつつ、光が差し込む窓に目を向けた。

一応客人ということで、見晴らしがいいところに泊めてくれているらしく、そこからは王都の様子が一望できた。

王宮の周りを固める小奇麗な貴族の邸宅。その周りを覆うのはソコソコ丈夫そうな一般邸宅。そして、外周部に位置するボロボロの廃墟などが立ち並んだ貧民区。

大きさ的には貧民区と一般区がだいたいおなじくらい。比率的に

いうならば2（貴族）：4（一般）：4（貧民）である。

「やっぱり、この国のてっぺんはあまり質が高くないようね。まともな政治家だったらあんな所、放っておかないでしょうし」

おまけに王宮の装飾がやたらと豪華だし。金箔とか貼ってあるし……。ずいぶんと余裕のある『魔王に侵攻され困り果てている王国』じゃない。魔王なんて本当にいるのかしら。

アリサは昨日王に言われた言葉に疑問を持ちながら、まとめた髪を髪飾りで止める。合気道有段者である彼女の母親が今年の誕生日にくれたもので、桜の花の飾りがついた髪留めである。普段は『稽古だぁあああ！！』としか言わないガサツな母が、珍しく買ってきてくれた女の子らしいものだったので、今では彼女の一番のお気に入りである。

母さん……。今どうしてるかな……。泣いては……いないでしょうけど。

自分が誘拐されたと勘違いした母親が、怒り狂って犯人を捜しまわっている光景が容易に浮かんできて、アリサは思わず顔をひきつらせた。

これは早急に元の世界に帰る必要がありそうね……。

アリサが決意も新たに、櫛を片手にコブシを握り締めたときだった。

「ん～。まぶし～い」

やたらとかわいらしいうめき声をあげて、親友が身を起こすのを鏡越しに確認したアリサは『まったく……』とつぶやきながら、朝に弱い親友の身なりを整えるために彼女に近づく。

寝起きであるにもかかわらず、さらさらと流れる黒髪を少しだけうらやましく思いながら、アリサは寝ぼけ眼の親友――《勇者》花街未来の頭をたたき意識の覚醒を促した。

「ほら、未来。もう朝だよ……。シャキッとする」

「ん～。だっこ～」

美しい……というか、かわいらしいといった方がいい顔立ちを無理やり起こされた苦痛にゆがませながら、未来はアリサに向かって両手を突き出してくる。どうやら抱き起してほしいらしいが、そんなものは高校に上がるときに卒業したので（アリサだけ）アリサは自力で立つように促した。

「バカなこと言ってないでさっさと起きる。今日は王様と朝食とってその時にこっちの話をいろいろとしてもらうんだから、さっさと起きる！！」

手のかかる妹の世話をするように怒鳴るアリサに『ケチィ』と頬を膨らませながら未来はずるずると布団からはいだし、近くに置かれたブレザーを手に取るのだった。

…†…†……†…†…

「そうなの！？　そんなあくどいことしていたんだ～」

「ほかにもね……クペー伯爵さんの三男坊が……」

現在は王都の朝食の時間。しかし、アリサは王都の会食の席にいなかった。『食事を食べる場所です』とメイドたちに案内された場所には１０メートルはあるんじゃないかと思われるくそ長いテーブルと、その両端におかれた無数の豪華そうな料理がおいてあったからだ。

ああ、これはあれだ。昔どこかのファンタジー洋画で見たことがあるあれ。王様と客人が端に座って会話もせず食事を済ませる『あなたと直接話す気はないけど、一応ポーズとして話す姿勢はとった方がいいよね～』という気持ちを体現したくそ長机だ。と判断したアリサは即座に朝食を辞退した。会話をする気もない相手に付き合って朝食をとれるほどアリサの心はおおらかではない。

まぁ、もしかしたらあの長い机越しに話す気なのかもしれないが、それを成立させるためにはかなりの大声を張り上げなければならないので、それはごめんこうむりたい。はしたないと思われるのは嫌だし。

普段の自分は完全に脇に置いて、さすがおしとやかな私！！　と自画自賛するアリサ。誰が見ても馬鹿な子である。

閑話休題。

というわけで早々に国王からの情報収集をあきらめたアリサは、ほかの貴族たちに見つからないように使用人たちが住んでいる、寮へと赴いたのである。

（情報はこういうところに集まるのよね～。家政婦はみたってやつ？）

案の定アリサが考えていたように、メイドたちは様々な貴族の噂話やその立場を聞かせてくれた。多分に個人の意見が含まれた話であったが、今のアリサにはそれでも十分にありがたい。

だが、

「政治上の裏話とかなら聞けたんだけど、魔法や戦闘方法になると話がなくなるわね……。まぁ、そんなことメイドさんに聞いても答えが返ってこないのは分かっていたんだけど」

彼女たちから聞き出せたことと言えば『魔法がある』ということと『うちの騎士団で一番強いのはゲイルという人物』ということぐらいだ。

もともと彼女たちは貴族たちの世話こそが本業だ。小説の世界みたいにくノ一気質なメイドを探そうとしても、身分を隠しているからこそのくノ一なのだからそう簡単に見つかるわけもないし、素人のアリサ程度に見つかるなら、その人物に頼るのはだめだろう。

ということでメイドに戦闘手段を聞くのはナンセンス。かといって、この国の騎士たちに頼るのもまたナンセンス。話に聞いたところによると騎士団たちは貴族の親族で固められており年々弱体化の一途をたどっているらしい。おまけに政治上の思惑も絡み、実力は

あるが貴族に反抗的だったり、才能はあるが立場が弱い人間だったりすると騎士団を無理やりやめさせ、城壁警備隊に放り込むなどという暴挙も行っているとか……。

そんな腐りきった騎士団に頼るつもりも、助けられるつもりもアリサにはなかった。そんなところに頼ったところで得られるものなどたかが知れているし、何より彼女のプライドが許さないからだ。

かといって、このまま貴族の厄介になり続けるのもかなり危険だ。この国の貴族は黒すぎる。こんなところにいてはいつ陰謀に巻き込まれるかわかったものではない。勇者の未来を相手にそうそう暴挙に出るやつはいないだろうが、友人の自分はそうではないのだから。一刻も早くこの王宮を抜け出す準備を整えなくては……。

「とはいえ……そのために必要な知識を与えてくれる人はいないし……八方ふさがりね～。あ～あ。私が主人公だったら、そのへんに強そうな人がいて『し、信じられない！！　なんという魔力だ！！　君、私の弟子にならない？』的な運命の出会いを果たして、ばっちりパワーアップとかを果たすんだけどな～」

ため息をつきながらそうつぶやいたアリサは、『運命そのへんに転がってない？』といわんばかりに、あたりを見回す。しかし、そんな簡単に運命が、

「いやいや……。ちゃんと働くよ。目が覚めたら」

「あと４時間したら考えねーこともねーですけど……」

「見張りの時間が終わってしまいますよ！？　どんだけ休む気ですか！？」

運命が……

「うっせーな。あんだけ長い時間警備兵を一か所に集めておいても大丈夫なくらい平和なんだったら、俺ら二人がサボったところで大した影響はねぇよ」

「部下へのケジメの問題です！！」

運命が……転がっていた。

だらけきった二人の青年になりかけた少年。それを怒鳴りつける女の子という変わった三人組。彼らの制服の肩には《盾とその後ろから延びるレンガ造りの城壁》という変わった紋章が刺繍されている。メイドたちがいっていた城壁警備隊の紋章だ。

あそこは、貴族たちが自分の利権を守るために『実力のある反抗的な人間』や『才能があって目障りな人間』を押し込んだ人材の宝庫で……。

「フフフ……。ありがとう運命。今日初めてあなたに感謝してあげる」

ものすごい上から目線でそんなことをつぶやいた後、アリサはできるだけ自然な笑みに見えるように三人組へと近づいて行った。

この数分後。場内を逃げ回る不良警備員三名と勇者の友人が、とんでもない速さで追いかけっこをしているところをメイドたちが目撃し、様々な噂となって城内を駆け巡ったのだが、またそれは別の話だろう。

4話

「それで、具体的にはいったいどういった話が聞きたいんだ？」

「そうね～。今日のところはこの世界にある魔法についてかしら？」

げんなりした様子のヴァイルをひきずりながら、アリサがやってきたのは、宮殿内にある巨大図書館。この図書館には『魔法大国』と呼ばれるにふさわしい大量の魔導書が蔵書してあり、唯一この国で勇者召喚以外に誇れる場所として国民たちに称えられている。おまけに一般開放もしているため、この蔵書から様々な魔法を学ぼうと、世界各地から学生がやってきたものだ。もっとも、最近では『国民が学ぶにはあまりに高度すぎる』という王の一声によって一般開放は禁止となり、この図書室は貴族にしか使えない《開かずの図書室》となってしまっているのだが。

「ったく……なんで俺がこんなこと。しかも今日に限って見張りの騎士がいないし。いたら罵詈雑言でも浴びせかけて強制的に城の外に放り出してもらえたのに……」

「もしいたとしても私が『秘技・勇者の友人のいうことが聞けないの！！』で押し通れたわよ。ていうかなんでそんなに不機嫌なの？　こんな美少女の助けになれるんだからむしろ泣いて喜びなさい！！」

「どこの暴君だてめぇ！！　この状況で機嫌よくお前に協力してくれるやつがいるならむしろお目にかかりたいよ！！」

ヴァイルはそういって床の上でじたばたと暴れた。そう、彼はい

まだにぐるぐる巻きに縛られたままだったのだ！！

「まったく私の友達はそんな状況になりながらも『ホンマしゃーないやっちゃな……』とか言いながら縄抜けをした後、無言で私を手伝ってくれたわよ」

「それはもう人間じゃねーよ。慈愛の神様に近い何かだ……」

まったく、使えないわね……といわんばかりの表情でヴァイルの縄を切るアリサに、ヴァイルは呆れを含んだ視線を飛ばしながらツッコミを入れる。

アリサはヴァイルのツッコミに肩をすくめながら『本当のことよ』と言った後、近くにあった車輪付きの梯子に足をかけそれを上り始めた。

あまりに蔵書量が多いこの図書館では、棚の一つ一つが規格外なほど巨大だ。高さは一番低いものでも5メートルはあるだろう。

当然そんなところに蔵書された本が何もない状態でとれるわけもないので、そういったところにある本は『科学の国』から輸入した、この車輪の付いた梯子を上って取りに行くのだ。

「えっと……儀式のすべて。秘儀77選。儀式魔法の成り立ち……」

「ああ、そこらへんは調べなくていいぞ。個人では使えないからな」

「え？　そうなの」

縄に縛られていた手をさすり、血の流れを元に戻したあと、アリ

サから離れた書庫へといき迷うことなく本を選び出していたヴァイルは、アリサのつぶやきに上がった本の題名を聞き、そう忠告を飛ばした。

「儀式魔法っていうのはこの国独特の魔法なんだよ。通常なら宮廷魔導師が数十人がかりで陣を敷いて、素材集めて、魔力とおして、数か月かけて発動するものだ。ちなみに勇者召喚もこれに分類されているな」

「ふ～ん。じゃぁ普段使っている魔法はどんなものなの？」

「それを教えるために本を選んでやったんだろうが……。ほら、さっさとこっちにこい」

ヴァイルは自分の手に積まれた大量の本を顎で示しながら、アリサにそう言った。

『放出魔法大全』『収束系のメカニズム』『大威力波濤魔法』『5属性放出理論』

やたらと分厚い本たちの題名にはそんなことが書いてあり、いかにも難しそうな学術書だということがわかる。

「もしかして……それ全部覚えるの？」

「まさか。魔法の魔の字も知らなかったバカにそんなことしてなんになる。適当な時間を見つけて暇つぶしがてらに読んだら面白いだろうな～という本を集めただけだ」

ヴァイルはそういうと、このへんだったか？　とつぶやきながら

自分の制服の懐を探る。梯子を下りてきて、ヴァイルが持ってきた本に目を通し『活字嫌悪症』を発動させ、即座に本を閉じたアリサは、そんなヴァイルを見て首をかしげた。

「何さがしてんのよ」

「魔法を教えるための資料だよ。あ、あった」

ヴァイルがそう言って取り出したのは、

「……これが資料？」

「ああ。今からお前に教えるのはこれだけで十分だ」

取り出したのは一枚のぼろい紙。どういうわけか、ヤニ臭いにおいが染みついているうえにかなりの年代ものなのか、元は白かったであろうと思われる紙が茶色く変色してしまっている。

そこには雑多な文字で『ググッとくるかんじ！！』とか『ボーン！！　といったかんじで』とか『ズババッ！！　という風に』など擬音が多分に使われた抽象的な説明の後に、『まぁ、最終的に必要なのは……気合いだ！！』で締められている。

それを見たアリサは、

「なにこれ？」

「放出系魔法の奥義書！！」

「ふざけんな！！」

思わずそう叫んでしまったという……。

…†…†……†…†…

「まぁ、誰でも使える魔法である放出系は、そんな細かい理論とかそういうのは全くない」

「そうなの？」

図書館の長い机に向かいあうように座った二人。外から差し込む光は若干オレンジがかり、太陽が落ちていることを二人に教えてくれる。

「放出系のやり方はいたってシンプル。魔力を練り体の一か所に集めてそれを放つ。それだけだ」

「本当にシンプルね……」

ヴァイルのざっくばらんすぎる説明に呆れきった表情になるアリサ。

そんなアリサの反応を無視して、ヴァイルは実演とばかりに手を掲げた。そして、次の瞬間、突然ヴァイルの手にまぶしいほどの白い光を放つ粒子たちが集合し、まるで燃えているように揺らめきながらヴァイルの手を覆った。それを見て、アリサは思わず嘆息する。

彼女としては、もっと高度な……それこそ『祖は精霊〇〇。集い来たりて敵をうて！！』といったわけのわからない呪文を早口で唱えてでの高速魔法戦というやつにあこがれていたのだが、この世界での実現は不可能のようだ。

「だが、シンプルな故に強力だ。特に持っている魔力が潜在的に高い奴はな。集められた魔力によってこの魔法は威力が変わる。つまり、より膨大な魔力を集めることができればそいつは圧倒的な力を発揮できるというわけだ」

まぁ、説明はこのくらいにして、つぎは実践だな。実際にやって見せるからよく見とけ。ヴァイルはそういうと魔力がたまった腕を振るいその魔力を放った。魔力は空間に解き放たれた瞬間、砂交じりの突風に姿を変えアリサの眼を強襲する！！

「きゃぁあああああああ！？　イタイイタイ痛い痛い！！　ちょ、目に砂が入ったじゃないの！？」

アリサはよく見ておけとヴァイルに言われていたため、目をかっと見開き何が起こるのかとヴァイルの手の方をジッと見ていた。そのため、突然の攻撃にまぶたを閉じることもできずにそれをもろに食らった。当然ものすごい勢いでヴァイルに抗議するが、ヴァイルは素知らぬ顔で指先に魔力を集中させ、再び放出。今度は砂の槍となったそれはアリサの額を強打し、大きく彼女の顔をのけぞらせた。

「っううううう！？」

「この放出系が起こす現象は自分の魔力の特性によって大きく決まる。たとえば俺の魔力属性は『土』だからさっきみたいに砂が飛ぶし、『炎』の奴だったら炎が飛ぶ。また放出の形態にも『収束』と

『波濤』という二つの形態がある。さっきの砂の突風が『波濤』。つまり魔力を放出の際に集めることなくそのまま放つことを言う。攻撃範囲が広いことが利点だが、代わりに威力が収束よりも低いのが欠点。また魔力消費も激しいから使うときは細心の注意が必要。次に使った砂の槍が『収束』。放出の際にさらに小さな点に魔力を集め、それを一気に放出する。一点集中という特性上、威力は非常に高く、収束された魔力は高速で打ち出されるために、魔力が低い奴でもそれなりの攻撃手段になる。ただし、所詮点での攻撃で攻撃範囲は狭いから、よっぽど熟練したやつでないと的にあてることはできない」

わかったか？

ヴァイルは、無理やり巻き込まれたことに対する復讐ができたためか、とても機嫌がよさそうな表情で額を抑えてうずくまるアリサにそう言った。

しかし、アリサがこのまま引き下がるわけもなく、

「ええ……よくわかったわ！！」

アリサはそういうと突如立ち上がり、ヴァイルに向かって手を突き出した！！

「だから実演してあげるわよ、先生！！」

額に青筋をうかべ、思いっきり体中の魔力に号令をかけるアリサ。彼女のイメージでは自分は華麗に魔法を発動し、先ほどのお返しとばかりにヴァイルを吹き飛ばす予定だった。

だが、

「へ〜。それで収束できたつもりなのか？」

「へ？」

どういうわけか、アリサの魔力はヴァイルの時のように瞬時に集まったりせず、ジンワリとにじみ出る感じでアリサの手をゆっくりと覆っていくだけだった。

光の膜につつまれた感じの自分の腕をぽかんと見つめるアリサに苦笑を浮かべながら、ヴァイルはどうしてそうなったかを説明してやる。

「素人が初っ端から魔法を使いこなせるわけがないだろうが？　通常の人間なら、まず魔力を体の一点に集めることに二ヶ月。それが瞬時にできるようになるのに一ヶ月。収束系を使うためにさらに魔力を圧縮するのに五ヶ月はかかる。つまり、お前がおれに復讐できるのは八か月後ということだ」

「そ、そんなぁ！？」

「というかお前……よく復讐なんて考えられるな。被害者は俺なんだけど？」

無理やり王室の陰謀に巻き込まれかけた一市民としてはちょっとしたいやがらせぐらい許してほしいヴァイルである。

「何を言っているの！？　こんな可愛い女の子が痛めつけられたんだから、その前の罪はすべてちゃらにしても復讐はされるべきよ！

！」

「いっそのことお前はこの世から消えるべきなのかもな」

若干アリサの性格の悪さを垣間見たヴァイルは、微妙に顔をひきつらせながら半ば本気でそんなことをつぶやくのだった。

5話

「ということがあったのですが……」

「お前……今日はべつに王宮警備に行かないことをその女に話さなかったな！？」

「聞かれませんでしたから」

アリサにつかまり協力を強制された翌日。ヴァイルは今日一日の部隊運行の予定を告げにサーシャの事務室へとやってきていた。実は昨日で王宮警備役はゴメンとなったのだ。

それはそうだろう。いつまでも王宮の警備を平民に任せておけるほど貴族はおおらかではない。おまけに今回は勇者が来ている。仕事風景の一つでも見せておかないと悪印象を持たれかねない。

昨日、一昨日の警備異常はあくまで特別措置だったのだ。

「それにしても勇者の友人か。なかなかいい性格をしているようだ」

「まぁ、勇者の友人というのも話半分ですけどね……。勇者の友人を名乗るにはいささか性格悪かったですし。もしもあいつが本当に勇者の友人だったら今代の勇者の性格を疑いますよ～」

はっはっはっはっ！！　と高笑いするヴァイルに『お前も十分性格悪いけどな』と言いう言葉を飲み込むサーシャ。世の中には言っていいことと、言わない方が誰にとっても幸せなことがある……。

「まぁ、我々には関係のないことだ。勇者がこようが魔王がこようが、我々はただ仕事をこなすだけ……」

そんなどこかの枯れた老騎士のようなことを言いながら再び書類に目を落とすサーシャをみて、ヴァイルは少しだけため息をつき、

「隊長王族なのにもったいないですよね～。その気になれば王宮に上がれるんじゃないですか？」

とんでもない事実を暴露した。

そう。サーシャは実はこの国の王族。生まれた順で考えるのならその階級は《第三皇女》。それなりの条件さえ整えば、まず間違いなく王宮で暮らしているだろう殿上人だ。だが……

「バカをいうな。私はお前と同じただの脇役だ。私は母親が王の戯れで孕まされた挙句捨てられた身分の低い女のため対外的には存在しない王女だぞ？　いまさら王宮になんて上がれるわけがない」

「いつも思うんですけど、それでよく王宮に復讐しようとか思いませんよね……」

「面倒だからな。国をどうこうするよりも、今はこうしてお前と一緒に王都の平和を守れているだけで満足だ」

「え……」

思わぬところでされたサーシャからの告白に、ヴァイルは少しだけ固まった後、

「ふ～ん」

意味深な笑みを浮かべた。

「な、なんだよ！？」

「いやいや隊長。結構かわいいこと言ってくれるじゃないですか。一生ついていきますよ！！」

「ばか！！　恥ずかしいこと言っていないでさっさと仕事に戻れ！！」

顔を真っ赤にして怒鳴りつけてくるサーシャににやにや笑いを飛ばしながら、ヴァイルは書類を片手に部屋のドアへと逃げる。

「それじゃ行ってきま～す」

「さぼるなよ」

「いくら隊長の頼みでもそれは無理な相談ですよ」

「私の頼みじゃなくても働け！！」

ツッコミとともに飛んでくるインク壺を、ヴァイルはあわてて身をかがめ回避する。

「ちょ、あぶな！？　フタあいているじゃないですかそれ！？」

「え、うそ！？」

フタのことに関しては気づいていなかったのか、放物線を描き飛んでいくインク壺を見てあわてるサーシャ。そんなとき、執務室のドアが開き、

「サーシャ総隊長はここにいるか？」

突如としてデップリト太った騎士団長が部屋に侵入してきた！！

当然ヴァイルが躱してしまったインク壺はそのまま騎士団長を直撃し、

「「あ……」」

二人が間の抜けた声を上げると同時に、ガラス製のビンが頭に直撃する鈍い音と、その中身のインクが騎士団長の顔にぶちまけられる音が響き渡って……。

「……」

「「……」」

騎士団長は無言のまま、彼にあたった後、床に落ちたインク壺を拾い上げ、ひとこと、

「よし……そこの二人を死刑にしよう」

完全に座った眼で腰に下げた剣を手に賭ける騎士団長に、ヴァイルは背中に背負っていた折りたたまれた槍を掴み取る。一触即発。

まさにそんなとき、

「そんなことされたら困るから、却下してもらっていいかしら騎士

団長さん？」

できるだけ聞きたくなかった声が仲裁に入った。

「お、おまえ……」

「は～い！！　きちゃった！！」

額に青筋を浮かべながら、あからさまに怒っていますといわんばかりの笑顔を浮かべて、そいつは執務室の中に入ってくる。

「今日一日こいつをかりたいんだけど……了承してくれるかしら？　総隊長さん」

黒い髪のポニーテールを左右に揺らし、アリサは再びヴァイルの前に現れた。

6話

「はぁ……なんでこんなことになったんだ？」

「縁ってやつじゃないかしら！！　よかったじゃない！！　こんな美人に付きまとってもらえるんだから～？」

「……チェンジで」

「この世界にもあるんだ……」

場所は南門警備隊詰所。城壁でそんな風に夫婦漫才を繰り広げるアリサとヴァイルを、クスクスと笑いながら、荷物検査を終えた商人たちは通り抜けていく。

そんな光景に嘆息をしながら、ヴァイルは執務室でやったやり取りのことを思い出していた。

……†……†……†……†……

「で？　何の用だ、こら？」

「命の恩人に向かってずいぶんな口のきき方ね？　もちろん私の魔法の練習に協力してもらおうと思っただけよ」

「ふざけんな！！　俺は今から仕事だ！！」

「いつもさぼっているお前が言うと説得力がなさすぎるな……」

結局勇者の友人の一声によって退散した騎士団長を除き、サーシャの執務室では三者三様の言葉が激突し、カオスを作り出していた。

……要するに揉めていた。

これ以上貴族の厄介ごとに巻き込まれたくないヴァイルは全力でアリサを追い出そうとする。しかし、アリサも手段を選んでいられる状況ではない。このままでは貴族にいいように利用されるのは必至だからだ。

「大体、なんでこんなところに来てんだよ！！　騎士団長よく許可出したな！！」

「『わたし～城壁警備隊見に行きたいの～ダメ？』って感じでぶりっこしながら聞いて、後ろの勇者を配置したからね～。勇者の友達の願いをむげにするわけにもいかないでしょう！！」

「お前の腹黒さは貴族も真っ青だ！！」

「や～ね。ほめても何にも出ないわよ？」

「ほめてねぇよ！！」

そんな二人の平行線上の言い合いに閉口したサーシャは、小さく嘆息したあと、

「やめんかこのバカどもがぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

思いっきり怒鳴りつけた。

「「っつ！？」

サーシャのあまりの声量に耳を抑えるヴァイルとアリサ。そんな二人を一瞥した後、サーシャはため息交じりに命令書を与えた。

「ヴァイル・クスク。貴様に三週間の特別任務を言い渡す！！」

「その言葉にトラウマが刺激されます！！」

「三週間……王宮賓客『富阪アリサ』の世話を命じる。騎士団長直々の命令だ！！　拒否権は我々にはない」

「！？」

あわててアリサに視線を戻すヴァイル。そして見つめられたアリサは、あさっての方向を向きながら下手な口笛を吹いていた。

何とも古典的な反応を示すアリサに、ヴァイルは思わず顔を引きつらせる。

「おまえ……騎士団長に命令させるとかどんだけ！？」

「あの人黒いうわさ絶えないからね～。ほんのちょっと本気だして調べたらあっという間に弱み握れたわ」

「……」

こいつもしかして腹どころか全身が真っ黒なんじゃねーの？　アリサの笑顔に底知れない恐ろしさを感じて、ヴァイルはツツッと冷や汗を流した。

…†…†……†…†…

と、まぁ、そんなわけで南門へと連れてきたのだが……。

「まぁ、命令されたからには仕方ない。とりあえずどこまで収束できるようになったか見せて見ろ」

ヴァイルは、先ほど部下から上がってきた積み荷の報告書に確認のサインを入れながら、商人に通るように指示をだす。そんなふうに、珍しく真剣に仕事をしながら、ヴァイルはアリサにそう指示を出した。

そんなヴァイルにアリサはにやりと笑い、

「ふふん！！　恐れおののくがいいわ！！　私の才能に！！」

と、なにやら自信満々に言ってきており、

「ハイハイ……」

ヴァイルは三白眼になりながらその言葉を受け流した。

なぜなら、魔法の体得は簡単なものではないからだ。才能があるといわれたゲイルですら魔法の完全習得には４カ月かかった。昨日今日で劇的な変化が訪れるわけがないと、そうタカをくくっていた。

だが、

「はぁっ！！」

何やら仰々しい気合いを入れて、右手に魔力を集中させ始めるアリサ。額には汗を浮かべ、目は完全に閉じている。集中していますよ～といわんばかりの顔で掲げる彼女の右手には、

「おいおい……うそだろ？」

昨日ヴァイルが見せたような、炎のようにゆらめく、魔力の塊が生成されていた。

……†……†……†……†……

「俺がそれ体得するのにどれくらいかかったか教えたよな？」

「あれ？　あれってあんたの体験談だったの？」

とりあえず、そんな光景を部下たちに見せるわけにもいかなかっ

たヴァイルは『どうだ！！』といわんばかりにドヤ顔をしてくるアリサを拘束し、食堂に連れ込んだ。

そこで、額を抑えながらアリサに話しかけたのだ。

「あたりまえだろ……俺の周りでちゃんと魔法が使えるやつなんて三人ほどしかいない」

「よくそんなので魔法大国名乗れるわよね……」

白けた瞳をこちらに向けてくるアリサ。そういわれると返す言葉もないヴァイルだったが……。ぶっちゃけ、この国がこんな風になったのは彼のせいではないので、そんな視線を向けられても困る。

「はぁ……。異世界の人間はみんなこうなのか？　正直成長が早すぎて気持ち悪い」

「失礼ね！！」

ぶちのめすわよ！！　といって手に魔力を集中させるアリサに、ヴァイルは真剣におぞましいものを見るような視線を向けた。

「事実だ。あんまこのことは人に話すな。強すぎる力に人は恐怖を覚える。そうなると、この世界では生きづらくなるぞ……」

いきなりヴァイルからぶつけられた真剣な言葉に、アリサは目を見開いた後、ひきつった笑みを浮かべる。

「そ、そんなわけないじゃない。大体それあんたの体験談であって、ほかの人たちはもっと早かったかもしれないし……」

「まぁ、確かに多少の誤差はあるが、俺が知っている中で一番早くそれを覚えた人間でも、俺の記録の半分……つまり会得に四カ月かかった。お前みたいに二日で覚えたやつなんて前代未聞だ」

そして、ヴァイルは最後にこう締めくくった。

「お前本当に人間なのか？　化物じゃないのか？　正直……今のおれはお前の才能が気持ち悪くて仕方がない。命令がなかったら今すぐにでも逃げ出したいくらいだ」

俺はほら……『強盗に襲われたところを勇者に助けてもらったはいいが、そのあまりに強力すぎる力に『化物！！』とかいって石を投げつける村人その壱』みたいな感じのわき役だから。

軽い口調でそう言ったヴァイル。しかし、彼の手が小刻みに震えていることに気付いたアリサはその言葉が、彼の本心だということを悟っていた。しかし、

「そう。でも、付き合ってもらうわ。たとえあなたが俺だけ私のことを嫌おうと、私が頼れるのはあなただけだから」

若干悲しそうな顔をしつつ、アリサはそうつぶやく。

その顔は涙も流していないのに、声も震わせていないのに、なぜか泣いているようにヴァイルには見えた。

そして、そんな表情をされてもヴァイルは意見を変えるつもりはみじんもなく、

「ああ、わかっている。面倒は最後まできちんと見るさ」

無表情になりながらそう答えた。彼らの間に落ちた気まずい沈黙。それはいつまでも破られることなく、彼らの間に重たく横たわっていた。

7話

スカイズ王国王都内にある巨大な城。そのもっとも高い尖塔の屋根の上に、一人の少女が三角座りをしていた。

夜風になびく黒のポニーテール。今の技術では到底作れそうもない上等な布で仕立てられたブレザー。

膝を抱えてそこに顔をうずめる少女は……そう、アリサだった。

月が彼女を優しく照らす仲、押し殺した声を上げる彼女。どうやら泣いているようだ。

そんな彼女の後ろに、

「こんなところにいたの？」

やけにのんびりとした声とともに、一人の少女が現れた。

夜風になぶられたサラサラと揺らめく黒いセミロング。美しい……というか、かわいらしいといった方が的を射ている愛嬌のある顔。

アリサの親友にしてこの国の勇者……未来である。

「なかなか帰ってこないから心配したよ？　朝食の時も食べに来ないしさ……。もう、王様に言い訳するの、大変だったんだから～。ほら、早く部屋にかえろ。ご飯はメイドさんたちが私たちの部屋に運んでくれたし」

そう言って、アリサの手を引っ張ろうとした未来。アリサはそれに抵抗して、未来の手を振りほどいた。

そっとしておいてよ。そういわんばかりのアリサの態度に、未来は嘆息しながら、

「もう……」

そういうと、ストンとアリサの隣に腰を下ろした。

「え？」

「いいわ。あなたが何も言いたくないなら言わなくていい。でも私はあなたの親友だから、放っておくことはできない。だから妥協案」

そういって、未来はアリサの肩を抱き優しい笑みを浮かべた。

「しばらく一緒にいさせて、アリサ。話してくれなくてもいいから、一人で悩むことは絶対にしないで」

「うぅ……」

そこで、アリサの涙腺が決壊した。瞳いっぱいに貯めた涙をこぼしながら、アリサは未来に縋り付く。

「うぁあああ！！　どうしよう！！　どうしよう未来！！　わ、私……嫌われちゃった。化物って言われちゃった……」

「うん……うん。わかった。わかったよ。今は一緒に泣こうね。それから落ち着いたら、その誤解を解くためにいっぱいがんばろうね」

アリサの泣き声を聞きながら、一緒に涙を流す未来。

もらい泣きというやつだろうか？　友人が自分に悩みを話してくれたことに対する、うれし泣きだろうか。

その答えを知っているのは空に浮かぶ月と太陽を守護する《光の女神》と、アリサとパスがつながった漆黒の魔導書だけである。

そして、その魔導書のもとに一人の少年が訪れていたことを王宮の連中は知らない。

「よぉ……久しぶりだな。悪法書（ハムラビ）」

『久しいな……暴君槍。我が主の力を持った小娘をずいぶんといじめてくれたみたいじゃないか』

地下でのそんな会話も知らずに、二人の異世界の少女は、ただ明日のために涙を流すのだった。

……†……†……†……

「でね、そのヴァイルってバカ、私がせっかく苦労して体得した魔力制御を見て『気持ち悪い！！』っていったのよ？　信じられる！！」

「それはひどいね！！　でもアリサ。私魔法の使い方なんて知らないんだけど、どうしてアリサは私のそのこと教えてくれなかったの！！」

「……。うん、そんなことはどうだっていいの！！」

「忘れていたんだね、アリサ……。もう相変わらず頭がかわいそうなんだから」

「み、未来？　ケンカ売ってる？」

「別に～。怒っているけどね？」

「あぁ……えっと……ごめん」

何やら雲行きが怪しくなってはいるが、アリサと未来は自分の部屋へと戻り、にぎやかな夕食をとっていた。

がつがつと元気よく食べるアリサと、フォークとナイフを使い上品に……とはいかないが、それなりに丁寧に食事を勧める未来。あまりに対照的な二人の食べ方。

なんとも、性格の違いが表に出やすい二人組である。これで親友だというのだから驚きだ。

「もう……そんなにびくびくしないでよ。ただの冗談じゃない」

「まぁ、それは分かっていたけど……」

「昔の私とは違うんだよ？」

その昔があるからキレたあんたが怖いんだけど……。

内心で、聞かれたら間違いなく未来が怒ってくるであろうことをつぶやきつつ、アリサは何とか笑顔を取り繕い未来の話を聞くことにした。

「まぁ、要するにその人とどうなりたいのかしら？　アリサは」

「まぁ、できれば仲良くしたいな～って。できないにしてもせめて気持ち悪いっていう評価は取り下げてほしいっていうか……」

アリサとしてはようやく見つかった協力者なのだ。異世界に来て王に気に入られてしまった未来ともなかなか会えない中、ようやく手に入れた（引きずり込んだともいうが）協力者なのだ。こんなところで不和を抱えていたくはない。

「ふ～ん。なるほど……」

アリサの言葉を聞き、しばらく考え込んだ後、

「アリサ不器用だもんね～。おまけにそれを自覚しているし……。不用意に行動起こすとさらにことがこじれそうで身動きが取れなくなっていた？」

「うっ……」

「もうにっちもさっちもいかなくて、でも私に頼るのはプライドが許さなくて、かといって周りに頼れる人間はいないから、八方ふさがりに陥って泣いていた？」

「ううっ……」

ズバズバ自分の心境をいいあてる親友に、バツの悪そうな顔をしてアリサは目をそらす。

本当に意地っ張りなんだから……。

苦笑交じりに未来はそういうと、料理がなくなった食器の上にナイフとフォークを置き、パンと手を合わせる。

「ご馳走様。……さて、まずはその人の誤解を解かないとね」

「誤解？」

未来の言葉に、アリサは首をかしげる。少なくともヴァイルは勘違いらしきものをしていた様子はないのだが？

「そうよ。だってあなたは私の親友なんだもの。気持ち悪いなんて絶対にありえないわ」

その自信にあふれたセリフに、アリサは一瞬だけぽかんとして……

「ぷっ……あはははは！　あ、あんた本当に天然ね！！」

「えっ！？　な、なに！？　私おかしなこと言った！？」

「だ、だってそうじゃない」

大多数の意見を間違っているといいきり、自分の友達が悪人なわ

けがないと信頼しきっている。そんなお人よしな言葉がアリサの笑いを誘った。

そして、

「でも……おかげでまた自信が持てたわ」

「そう。よかった！！」

そんなお人よしな彼女に、アリサはまた救われた……。

7話（後書き）

8話

「それにしても『気持ち悪い』は言い過ぎでは？」

「仕方がないだろう。ああでも言わないと、あいつ俺らから離れなかったぞ？」

「大将～。『俺ら』って……。ナチュラルに俺たちも入れんのはやめてくんねーですか？」

「あくまで頼まれたのは旦那ですからね～」

あくまで予防線を張ってくる悪友二人に、ヴァイルは若干顔をひきつらせ文句を言ってやろうかと口を開きかけたが、

「はぁ、やめだ。せっかくの休みになんでこんな辛気臭い話をしないといけないんだ」

「「ですよね～」」

そう言いながらアルフォンス、ロベルトは大きく頷きながらカップを傾けた。

場所は平民街のとある喫茶店。ヴァイルたちは久々にサーシャから出された休暇を消化するために、こうして街に繰り出してきていたのだ。

「で、今日は何するよ？」

「ハイハイ！！　妓楼に行きたいです！！」

「却下。今日は火の曜ですし、商業祭にでも行きましょうか？」

「わかった……ロベルトの意見を採用するか」

「な、なんだと！？　このむっつりどもめ！！」

「あはっ♪　旦那～。すいません。どうやら今日は二人で回ることになりそうです」

「いいぞ～。ぶち殺せ」

「あいあいさ～」

「え、え？　ちょ、冗談だよね！？　ほんのおちゃめな軽いジョークじゃないなか！！　ははは！！　やだな～。二人は相変わらず冗談が通じないぎゃあああ！？」

ロベルトの指先からとんでもない勢いで放出される水を、アルフォンスは必死の形相で回避する。

ロベルトの攻撃は収束を極めたただの鉄砲水なのだが、その照射される速度が違いすぎる。

ロベルトから照射された水のレーザーは瞬時にアルフォンスが座っていた椅子を貫通！！　石畳に水のレーザーを同じ大きさの穴を深くうがった！！

アリサがこの場にいれば大いに顔をひきつらせながら『どこのウォーターカッター！？』とつぶやいたことだろう。

「お、おまえ！！　こ、これは洒落にならねーですよ！？」

「おやおや？　痛みこそが至上の娯楽と豪語しているあなたがこの程度の痛みも耐えられないとでもおっしゃるつもりですか？」

「物事には限度というものがあるんじゃねーですか！？」

「ふむ、困りましたね～。これではアルが殺せませんし……しかたがない。不本意ですがこのセリフを……ゴホン。『ごちゃごちゃいわずに折檻受けなさい！！　この犬っ！！』」

「攻撃受けてもいいかなって思った自分に絶望した！！　でも、俺は省みない！！　後悔しない！！　前だけを見る！！　どんとこいや！　マイハニ～！！」

「うわ……何か叩いてはいけない扉をたたいてしまった気分です」

「はいはい。バカ話はそれくらいにしていくぞ、お前ら」

何やら上気した感じに頬を染め、大の字になって地面に寝ころび攻撃を受ける準備をするアルフォンスに、ロベルトは顔に縦線を入れて思いっきりドン引きした。

そんな悪友二人の様子に苦笑を浮かべながら、迷惑そうにこっちを睨みつけていた喫茶店の店主にお題を払ったヴァイルはロベルトの頭をポンとたたき、アルフォンスの頭を無造作にけりとばし、二人に移動を促す。

そんなときだった……

「ごめ～ん！！　まった～！！」

何やら白いワンピースを着て、白いつば広野帽子というお嬢様装備で身を固めた美少女が、長い黒髪をなびかせながら喫茶店に入ってきた。

「おや？　いまどき珍しい清楚系美人！！」

「アル……君はサーシャさんみたいな人が好きなんじゃないの？」

「いや罵られるのはいいけど、やっぱ結婚するならおとなしい子がいいなって思うじゃねーですか！！」

「あなたがそんなノーマルな感性を持っていること自体が意外ですよ……」

「まぁ、確かにいまどきはあんな女は少ないからな～。貴族もうちの警備隊の連中も、傲慢なやつとか女傑なやつが多すぎる」

「ああ……。うちの国は女に幻想を抱くことができねー国だったのですかい」

「いろいろな意味で残念そうな国ですね」

「まったく……女はかくあるべきなんて言うつもりはないが、もう少しおとなしくしてくれてもいいよな？　もう男の味方はロベルトだけだな」

「そうですね～」

「僕は男なんですけど？」

ヴァイルたち三人はそんなことを話しながら、見知らぬ清楚系美人さんの隣を通り過ぎようとした。

それはそうだ。今まで出会った女のなかで、こんな女の子らしい恰好をしているのは貴族のご令嬢（美容に金をかけているのかソコソコ美人なのが腹立たしい）だけである。つまり、今現在隣に立っているのは貴族関係者。

自分たちには縁遠い存在だし、不用意に話しかけようものなら面倒なことになると本能的に察知していたからだ。

だが、

「待ったっつてんでしょうが？」

どうやらそれは彼らの勘違いだったようで、

「ふんっ！！」

「へっ？」

突如としてヴァイルの片手を掴んだ少女は、瞬時に片腕の関節を決めヴァイルの足を払った！！

「なっ！？」

「「えっ！？」」

今までヴァイルが投げられるところなど見たことがなかった二人は、あっさりと宙に浮き空中をしばらく遊泳するヴァイルをしばらく呆然と見た後、

「ギャッ！！」

カエルがつぶれたような悲鳴とともに、ヴァイルが床にたたきつけられるのを見てようやく正気を取り戻し警戒態勢に移る！！

「な、なんですかいったい！！」

「おいおい……大将投げるとか一体何もんですかい！？」

「なにもんって……」

少女は目深にかぶっていた白いつば広帽を少しだけあげ、その素顔をさらし、

「「「っ！？」」」

「かごの鳥ちゃんだけど？」

三人の顔をおおいにひきつらせた！！

そう。彼女の正体は昨日こっぴどくヴァイルに拒絶された、勇者の親友。富阪アリサだった！！

…†…†……†…†…

「そろそろあいつらに会う頃かしら？」

執務室で三人分の書類を凄まじい速度で片づけていたサーシャは窓から差し込む太陽の位置を確認して、そうつぶやく。

その書類の山の隣には、三枚の休暇申請書とともに、王宮から渡されたある少女の懇願が置いてあって、

「まったく……ヴァイルの奴。女に向かって気持ち悪いというなんて……」

サーシャ・トルニコフ。城壁警備隊の女傑にして、基本的に弱者の味方。そんな彼女は基本的に女性の味方であり、男に理不尽にしいたげられた女を、全力をもって守る。

よって、

「万死に値するな」

にこやかな笑みの下にどす黒い怒りを押し隠しながら、サーシャはアリサから申請されたちょっとした計画書……《ドキドキッ大作戦！！　私だって普通の女の子なんだぞ♪》などというふざけた書類に《承認》のハンコを押したのだった……。

…†…†……†…†…

そんな風にサーシャが少々危険な笑みを浮かべているとはつゆ知らず、ヴァイル・ロベルト・アルフォンスの三バカは近くにあった噴水広場のベンチに座り、ドヤァとばかりに胸を張るアリサに三白眼を向けていた。

「で……いったいなんでこんなところにいるんだ？」

「今日はあなたたちも休みなんでしょう？　そんな中で修業の面倒を見ろ！　なんて言うほど、私は人でなしではないわ！！」

「あれ？　空耳ですかねー？　今信じられない一言を聞いた気がするんですけど？」

「まったく……鏡みてからいえってーんですよ」

三人掛けのベンチの領土なるに座るロベルトとアルフォンスに、指先に収束した魔力を放ちぶつけるアリサ。

その魔力は放たれた瞬間紫色に変色し、二人の額を強打した！！

「「ぎゃぁあああああああああ！？」」

得体のしれない痛みを感じ、悲鳴を上げながらベンチから転げ落ちる二人を見てヴァイルは思わず顔を引きつらせる。

「お、おまえ……もう修行とかいらないだろ……」

そんなヴァイルの言葉を無視して、アリサは説明を続けた。

「でね？　私最近ここに来たばかりじゃない？　だったらあなたたちの休みついでに、この町の観光や、この世界についていろいろ実地で説明してもらおうと思ったわけ！！」

「ふ……ふざけんじゃねーですよ。俺たちはこれから男三人のむさくるしい休暇を楽しへブッ！？」

今度は紫色の突風が飛んだ。本当に修行の必要がないくらいの上達っぷりである。

「もちろん……いやだとは、言わないわよね？」

そして、トドメとばかりにこやかな――目が全く笑っていない――優雅な笑顔。

殺気交じりのその笑顔に、ヴァイルは大きくため息をつきながら、表情を一変させる。今までの呆れきった顔ではなく、鋭い……詰問するかのような顔に。

「はぁ……。昨日俺が言った言葉の意味が分かってんのか？　異世界に来て日もないから理解できなかった……なわけねぇよな？」

「当然！！　ヘタレで、腰抜けで、小市民なあんたは、私のことが気持ち悪くて怖いんでしょう？」

アリサはヴァイルの言葉を真っ向から受け止め、

ヘラッと笑った。

「で？　それが？　なに？」

「！？」

「理解してもらえないなら理解してもらえるまで根気強くやるのが私の主義よ！！　少なくとも私はただの女の子で、化物でも怪物でもないと分かってもらえるまで……あんたの誤解が解けるまで、私はあんたに付きまとうわ！！」

自信にあふれたアリサの言葉に、ヴァイルは少しだけ絶句する。

「迷惑だ」

「わかってるわ」

「徒労に終わるかもしれねーぞ？」

「知ってる」

「説得ができるまでは地獄の時間だぞ」

「覚悟してるわ」

「……」

何この男前？

ヴァイルは自分の言葉によどみなく答えるアリサに、しばらく額を押さえ、ため息を漏らす。

まったく……。隊長といいこいつといい……どうしてこうも簡単に、人の心を変えられるんだ？

あまりに理不尽すぎる、魅力（カリスマ）の暴力に、

「いいぜ……。観光案内ぐらいならしてやるよ」

「やった！！」

ヴァイルは『これだから主人公は……』と呟きを漏らしながら、笑うのだった。

……†……†……†……†……

それからは……それなりに楽しい時間だった。

今日は火の曜日。平民区の商業祭日。毎週火の曜日には露店が大量に表通りに並び、普段では絶対おもてで売らない裏の商品が解放される日なのである。

珍しい掘り出し物をはじめ……この日を狙って作られた屋台料理や、食堂の新メニュー。客寄せのための見世物や、パフォーマンスがあらゆる場所で行われる、ちょっとしたお祭りなのだ。

「おお！！　何あれ！？　雑技団！？　サーカス！？」

「お前の世界にもあるのか？」

「最近噂になっている幻想サーカスですよ。あれ、ほとんどのトリックが天使の国の魔術っていう噂ですけど本当でしょうか？」

「ああ……あのきつい感じの眼をしたお姉さん。いい……」

「って、アルフォンスがなんか変なところにトリップしています！？」

「いつものことだろ？」

「いつものことなの！？」

屋根と屋根の間に、下からでは見えないほどの細い糸を張り、その上を釣り目の美女が歩くのを、口笛を飛ばす市民たちと一緒に見物したり、

「って……なにいってんの！！　もうちょっとまけなさいよ！！」

「勘弁してくだせぇ貴族の御嬢さん！！　これ以上下げちまったらおまんまの食い上げだ！！」

「ただのガラス球売っているだけのくせして何言ってんの！！」
「ばかっ！？　やめろ！！　お前の世界ではどうかしらねーけど、こっちじゃガラスは貴重品なんだよ！！」
「オジサンごめんなさい……。これ買い取らせてもらいますね？」
「親父～。ついでにこれも負けて？」
「アルフォンス～。空気読みましょうね？」
目を離したスキに露店のおやじに食って掛かっていたアリサを取り押さえたり、
「しょ、勝者……アリサ！！」
「イッェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエイ！！　さぁ、次はだれが相手よ！！」
「なぁ、これで何人目だ？」
「えっと……二十二人目ぐらいですね」
「さっきのおっさん……土木業者だぞ。腕力だけなら兵隊より上の」
「ほんと彼女何者なんでしょうね……」
「そんなこといいじゃねーですか！！　見てください大将！！　掛け金がこんなに！！」

「貴様らぁあああ！！　ここで何しとるか！！」

「「「「げっ！！」」」」

隠れ賭博（内容は腕相撲勝負。もちろん違法）で一儲けしていたところ、祭りの管理委員会に見つかりこっぴどく絞られたり……。まぁいろいろだ。

「は～あ。楽しかった！！」

「最後はあんまり楽しくなかったけどな……」

「ああ、俺の金……」

「『悪銭身につかず』ですよ、アルフォンス」

結局、賭けの儲けは根こそぎ管理委員会に取られてしまい。骨折り損のくたびれもうけに終わった四人は、夕日に染まる大通りに設置されたベンチ二つを占領して休憩を取っていた。

金が手に入らず大いにへこんだアルフォンスに、アリサは少しだけ苦笑を浮かべて、ベンチから立ち上がる。

「仕方がないわね……。今日はいろいろお世話になったし……何かおごってあげるわよ？」

「「「マジで！？」」」

途端に食いついてくる三バカに、アリサはややのけぞりながら苦笑を浮かべる。

「え、ええ。で、でもあんた達手に職つけた男が、女におごってもらうこと喜ぶってどうなの？」

「バカ！！　城壁警備隊は隊長だろうが平だろうが薄給なんだよ！！」

「唯一の例外は総隊長ですけど……あの人、自分の給料から僕たち隊長陣の給料を上乗せしているので、彼女自身もそれほど自由にできるお金ないですしね」

「上乗せされてるつっても、所詮は個人の給料。しかもそれの一部を三等分しているせいで、隊長と平の違いなんてスズメの涙程度のもんですし……。平民官職には厳しい国ですぜ」

ハハハハハ……。と、すすけた笑いを浮かべる三人に、アリサの顔は思わずひきつる。

どことなく、仕事に疲れたサラリーマンのような空気を感じ取ったからだ。

「そ、そう。苦労しているわね。わかったわ！！　今日は私のおごりでいいからじゃんじゃん食べていいわよ！！　騎士団長から（脅して）軍資金はたっぷりもらったし、お金には余裕があんのよ！！」

そういって、近くにあった屋台に走っていくアリサ。そんな彼女の背中を見つめるヴァイルに、ニヤニヤと笑みを浮かべたアルフォンスが話しかける。

「で、大将……。どうっすか？　認識変わったんじゃねーですか？」

「まぁなぁ……。というか、あいつが普通のガキだってことは分かっていた」

「ありゃ？　じゃぁなんで昨日みたいなこと言っちまったんですか？」

そりゃぁ……。ヴァイルはそこまで行って口を閉ざす。

言えるわけがなかった。

自分が知っている力に、彼女の魔力が似ていたからなどと。

言えるわけがなかった。自他ともに『化物』とみとめた、不死の怪物と同じ魔力を彼女が持っていたからなどと。

一応、昨日の深夜に感染魔術を使い、それの詳細を知っているだろう人物にコンタクトをとったのだが、そいつ自身は力の覚醒を促しただけで、彼女があの力に目覚めたのは彼女自身の才能だといっていた。

だとするなら……。

「ん？　旦那。なにか雲行きがあやしいのですが？」

ヴァイルがそこまで考えたときだった。

突然ロベルトが不思議そうな顔をして立ち上がり、アリサのもとに走り出したのは。

なんだ？　と思いヴァイルが見て見ると、そこには屋台の商品を片手にあたふたと慌てふためくアリサの姿。そして、そこに到着し苦笑を浮かべながら主人に代金を渡し（そのさい『お嬢ちゃん偉いね～』とでもいわれていたのだろう。主人が商品を一つサービスしてロベルトの頭を撫でていた）、半泣きのアリサを連れてくるロベルトがいた。

「どうしたんだ？」

「……財布すられた」

ヴァイルの問いに、へこんだ声で答えるアリサに『ああ……』と言わんばかりの表情で、三人が微妙な笑みを浮かべる。

この祭り……にぎやかなのはいいが軽犯罪が多い。先ほどの違法賭博しかり、裏路地でのカツアゲしかり……アリサがあったスリしかり。

本来治安を守るべき騎士が王宮から降りてこないので仕方ないといえば仕方ない。

おまけに、祭りの管理委員会としても、無理に騎士を引き出して王宮から変な因縁をつけられ『祭り禁止！！』なんて言われても困るので、こういった軽犯罪に関しては自力でなんとかするしかない。だが、所詮は一般人の対策なので穴も多く、一向にこういった犯罪は減っていないのが現状だ。

まぁ、祭りの初心者は必ず一回は通る通過儀礼みたいなものなので、三人は無言のままポンポンとアリサの肩をたたき、

「ドンマイ」

「まっ……期待していなかったし」

「騎士団の金だったんですからよかったじゃないですか」

三者三様の慰めをアリサに与え、さらにアリサをへこませるのだった。

……†……†……†……†……

夜の闇に包まれた裏路地の中、だぶついたローブとフードで全身を覆った二人の人影が悠然と歩いている。

一人は子供のように小柄な男。もう一人は体のメリハリが大きなローブの下からでもわかる、女だった。

そんな二人が裏路地を歩いていては当然よくないものを呼び寄せるわけで。

「ヘイヘイ御嬢さん……ここを通るなら通行税おいてけや」

「なんなら体で払ってくれてもいいよ？　ギャハハハハハハ！！」

下品な笑いを浮かべて、いかにも『悪やってます』と言わんばかりの汚らしい恰好をした男二人が、長いナイフをちらつかせながら

十字になった裏路地の陰から現れた。

しかし、先頭を歩いていた女は特にあわてた様子も見せず、フードから唯一の除いた血のように赤い唇を三日月のようにゆがめ、一言。

「じゃまだ虫けら。身の程をわきまえろ」

「ああん？　何言っちゃってんの？」

「痛い目にあいたいのかな～？」

女の傲慢な言に、男たちは若干腹を立てたようで、今までの下品な笑みをひっこめナイフを構える。

それなりに訓練された構え。おそらくある程度の修羅場をくぐってきたのだろう。

だが、

「聞こえなかったのか？　虫けら」

女にとっては、その程度の経験値は無にも等しかった。

「「えっ？」」

男たちは、そう声を漏らした後ごとりと首を落としながら絶命。

首から飛び出す噴水のような血を、女はしばらく見つめた後。

「ふん。『汝は我が血肉』」

一言、異質な言葉をつぶやき興味もなさそうに再び裏路地を歩きだした。

女の後ろでは、どういったわけか、男たちから噴き出した血液がまるで獣のように姿を変え完全に血が抜けきった元主の体を跡形もなく食い尽くしている。

「それで？　久しく連絡がなかったお前から緊急報告とは珍しいな。私が伝令手だから連絡は控えたいのではなかったか？」

「……」

自分が起こしたおぞましい光景に見向きもせず、女は酷薄な笑みを浮かべて自分の肩に話しかける。そこには小さな虫が止まっており、キラキラと大きな複眼を輝かせていた。

「なに？　勇者だと？　ふん。バカバカしい。そんなことのために私たちを呼んだのか？　今代の我等が主は無敵無双。不老不死だ。たかだか人間ごときに負けるわけがなかろう」

女の返事を聞き、虫は残念そうに首を振った後、羽を広げて飛び立った。

それを見送る彼女の後ろにはオオカミのような形になった血液がするすると近寄り、瞬時に形を崩した後、赤黒い流れとなって彼女のローブの中へと消える。

それを見ていた男は、ボソリボソリと言葉を紡いだ。

「よろし、かった、のですか、へいか。きゅう、えん、よう、せい、という、ことは、それ、なりに、せっぱ、つま、って、おられ、たの、では？」

「はっ。下らぬことを言うな、ヘイクラス。勇者といっても発展途上の若造に負けるような奴はわれら四天王にはおらん。あと、私のことは陛下とは言うな。われらが陛下はただ一人だ」

「もうし、わけ、ありま、せん」

「それに……」

「？」

ここで暴れたら……復讐心を抑えられなくなっていただろうからな。

今まで聞いたことがない、怒りに満ちた女の言葉に小柄な男は戦慄し、恐怖に固まる。

自分の主をここまで怒らせる人物とは、いったい何者なのだ！？

男がそんな風に怯えているとはつゆ知らず、女は裏路地を照らすように雲の隙間から現れた月を睨みつけた。

「こんなところで平兵士をしているとはな……。立場さえなければ殺してやったものを……」

おのれ、暴君槍め。

そうつぶやいた女の瞳は、人では決してありえない金色に染まっていた。

…†…†……†…†…

祭りが終わった翌日。

早朝の城壁警備隊の詰所前にて、一人の少女が所在なさそうに立っていた。

黒い髪に茶色い瞳。長い髪をポニーテールにまとめたその姿は、もう間違えることもないだろう。富阪アリサだ。

あの祭りの後、ヴァイルの誤解が解けたかどうか心配だったアリサは、こうして普段より早めに詰所にやってきてヴァイルが出てくるのを待っているのだ。

気持ちがうわつく。なんだかイライラする。何かをしないと落ち着かない。

そんな風に、そわそわとアリサが落ち着かない時間をしばらく過ごした時だった。

やっと詰所の窓から、木製のドアが取り除かれ、中から大きな欠伸をしたヴァイルが顔を出した。

「んぁ？」

「あ……」

そして、二人は目があい、

「「……」」

しばらく無言になった後、

「こんな朝早くに来るなんて……暇人なのか？　アリサ」

「否定はしないけど、朝あったらまずいうことがあるんじゃないの？　『おはよう』とか『グッモーニーング！！』とか？」

いつも通りのヴァイルの対応に、アリサはそっとため息をつきながらそう返した。

その声からは、恐怖はみじんも感じられず、

いつものように、

「めんどくさいな～。とにかくあがれ。今日は何の勉強するんだ？」

「魔法については大体習得したから、あとは私の属性について知りたいのよ。魔力が紫色にかわる属性って何か知ってる？」

「……いいや。知らないな」

「そうよね～。図書館で調べてもなかったし……いったい何なのかしら？　あれ？」

のんびりと、穏やかな、それでいてどこかだるそうなそんな雰囲気が込められていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7134w/

ある脇役の英雄譚　改訂版

2011年12月1日21時47分発行